

特集
京都・シネマパラダイス
映画に行こう!

京都 それぞれの京都論
TOMORROW

1994/3

Vol.2-No.10

隔月刊

座談会 映画都市・京都
いま潜行期を生きる

映画の思い出——鶴見俊輔
活動屋たちよ、頑張れ——折田泰宏
坂根田鶴子さんのこと——小野恵美子
現場の声 映画を支える人達
殺陣師、メイク、エキストラ、小道具、スタントマン
衣装、ライトマン、生活と現場
時代劇映画のロケ地巡り
京一会館、朝日シネマ、みなみ会館
自主映画の今



かつてそこにあった息吹きであるとか情熱であるとか、それを額縁やアルバムに閉じ込めて鑑賞するという行為は残酷なわざでもある。それが消えてなくなっただけでも、死に絶えたわけでもないのならば。

過去の祭りをそのままに妄想するよりも、今に続くたしかな余韻をたぐり寄せれば、地下水脈のような鼓動がしぶとくみなぎっているのがダイレクトに伝わってくる。

パン工場のとなりに住んでいた少女は、パン屋のとなりの少年よりも深くパンを愛していたかもしれない。印刷工場のとなりに住んでいた少年は、本屋のとなりの少女よりも深く本を愛せるかもしれない。かれらは口に出さずとも、よくそれを知っていたから、その誕生にいつも近くで立ち合っていてしまったから。

京都と映画。夢の箱のような映画館から飛び出す天使や悪魔たちにもう一度会いたい。

京都シネマパラダイス。

一九九四年——千三百年に向か
て





今年は、794年に京都に都が移されてから1200年。京都府・市、平安建都1200年記念協会などが、様々なイベントや事業を予定しているが、必ずしも関係者の思惑通りには進んでいない。

大みそか深夜から元旦にかけては、鴨川の河川敷で新年を迎えるカウントダウンが行われた。初もうで途中の人達が集まり、河原への入場制限がなされるほどだったが、催し物としては平凡でいまひとつ盛り上がり欠けた。



百年前、先人の作った琵琶湖疏水は、水力発電によって日本初の市電を走らせ、現在も京都市民の生活を支える。今回、多くの記念事業の目玉であるJR京都駅ビルや、市営地下鉄東西線が完成が遅れが必至。何よりも、建都千三百年の年に「現役」がいくつ残っているだろうか。

(写真は東山区の九条山浄水場で)

この四月十日に行われる京都府知事選挙は、四年前と同じく現職の荒巻禎一（写真左の右側・一昨年の時代祭りで）と、市民団体代表の木村万平（写真下・右から二番目）の一騎打ちが予想される。荒巻は記念の年に三期目の府政を担えるか。木村にとっては、前回の市長選、知事選に続く三度目の正直となるか。国勢の図式が変わった中、「地方は地方」とまとまろうとする保守に対し、革新がどのような選挙戦を挑むか注目される。（文中敬称略）



不況を脱せないまま暮れた93年。「今年こそは景気回復を」。商売人ならずとも、お稲荷様にすがりたい。この手で福を引き寄せんと、三が日で252万人が訪れた。

（1月2日伏見稲荷大社で）



特集

京都・シネマパラダイス

映画へ行こう！



伊藤 大輔

大河内傳次郎

唐沢 弘光

映画の思い出

鶴見 俊輔

「死して護国の鬼」と、そこまで、自分の腹からわきでる血で書いて、ぱったり倒れる月形半平太の姿が、今も心にのこっている。あとでしらべてみると、沢正こと沢田正二郎出演の古い映画が、死後何年も出まわっていて、それを見たものらしい。

目玉の松ちゃんの映画にも会った。山科閑居の大石内蔵之助が妻子を離籍し、彼女たちが門を出てゆくのを、ひとりこもって自分の部屋の障子の穴から片眼で見送っているところで、前篇の終りとなった。そのころは、スターが死んでも、死後十年くらいは名声がつづき、その映画もくりかえし場末の劇場に出まわっていた。

「薩摩飛脚」も心にのこっている。大河内傳次郎、伏見直江主演だったが、伏見直江が妖艶に見え、ひきよせられた。

「隣の八重ちゃん」、これは現代劇で、大日方伝、逢初夢子、岡田嘉子、高杉早苗、飯田蝶子、阪本武、出てきた俳優の名前を六十年後の今もよくおぼえている。朝、小学校にゆくふりをして麻布十番の映画館があくのをもって、そこに入り、弁当をそこであけて食べた。この映画をその日のうちに三度は見たことになる。

こういうくらしをしていると、どんな罰がくだるかかわからないと思ったが、その不安がたのしみをするどくした。こうして映画はおもしろいものだと考えるのが私の中に根をおろした。たいいていの映画が今でもおもしろい。

母親の攻撃によってできた傷を、映画とマンガと講談本でなおそうとした。そういうかたよった映画、マンガ、小説の見方が、専門の批評家の見方とちがうのは当然だ。私は自分のかたよった人生を生きるために、自分の人生の一部として映画とマンガと文学を見ている。

京都 TOMORROW

VOL.2 第10号 (通巻第32号)

目 次

●グラビア 一九九四年——千三百年に向かって 写真と文／ 中山和弘 1

京都・シネマパラダイス——映画に行こう！

映画の思い出——鶴見俊輔 5

映画都市・京都 いま潜行期を生きる

平田博志・井上茂・岡田榮・小野恵美子・各氏

活動屋たちよ・頑張れ！——折田泰宏 8

坂根田鶴子さんのこと——小野恵美子 29

鞍馬天狗のおじさんは——野口良平 32

東映時代劇映画の復活を——岡田榮 38

町のライブラリーとしてのレンタルビデオへ——那須耕介 47

君は「電動くのいち」を見たか!?——原祥雄 48

映画を支える人達

殺陣師——20 メイク——21 エキストラ・斡旋——21

小道具——22 スタントマン——22 衣裳——23

ライトマンの現場・集中力とチームワーク——24

生活と現場「絶対に、よい映画を作るまでは……」——26

時代劇映画のロケ地巡り——34

映画人の思い出——「フランソア」の立野留志子さんに聞く——36

映画製作・俳優をめざす人たちのための入所・入塾案内——28

大河内山荘——25 ひとくち映画ニュース——37

京一会館がのこしたものを——弘原海晃さんに聞く——40

特集

■現場の声

■ウォッチング

■案内

■映画館情報

■自主映画の今

映画は世界と出会う場所——朝日シネマ・神谷雅子さんに聞く——	42
ずぼら映画ファンのパラダイス——みなみ会館——	44
「浮島丸事件」を人間ドラマに!!——平安建都二二〇〇年映画をつくる会——	39
学生、学生による、学生のための映画——朝日シネック——	45
RCS——50——	51
ドキュメンタリーフィルムライブラリー——中川ユリ子——	52
京都国際映画祭は打ち上げ花火に終わるか——	53

●べんちゃん日記 ⑦

唯野弁太郎

●TOMORROWライブラリー

『あわてるから

あかんのや

提保敏・著——上求菩提・下化衆生——

京都発新刊三冊

『私の顧問弁護士』『古代史探険—京・山城』『京都・久多』

●TOMORROWジャーナル

タクシー料金値下げ許可／迎賓館建設に市民から異論続出／ほか

●TOMORROWひろば

●建築探偵団調査⑨

疏水二条橋

田満字洋介

●京都エコライフ情報③

冬の鴨川に入って生きものを見る

大塚泰介

●くらし

醗酵を待つ

多津八洲子

●ギャラリ

畏怖することの飲び

人見ジュン子

●ミュージック

音楽が好き

河上ひかる

●京・若者発

「三都物語」の主人公は

高橋 葉

●ステばあさんが行く⑩

そんな若者に誰がした

神楽岡ステ

活動屋たちよ 頑張れ!

折田 泰宏

キネマ旬報の昭和二十九年（一九五四年）一月上旬号に京都映画の特集がなされている。

二十九年と言えば日本の映画が全盛期を迎えようと言う頃である。ここで故萩昌弘氏は「京都という映画都市——正確に言うなら太秦という映画街は、……よく言えば、他の制肘を受けぬ独立した映画のアトリエであり、悪く言えば余りにも閉鎖的な活動屋部落ではないのか。」と書いている。井沢淳氏は「古い因習が焼け残ったこの町に残っているように、『活動屋』の世界がそのままある。」と手厳しい。

しかし、京都のこの因習、閉鎖性、厳しさに欠けたように見えるノンビリさ加減、これらが世界的な映画祭でグランプリを獲得するすぐれた作品を生み、カラー映画、シネマスコープ、七〇ミリという新しい技術を真っ先に取り入れた土壌となったのである。

日本の映画は、明治二十九年に京都モスリン紡績会社の稲畑勝太郎がフランスからシネマトグラフを輸入し、四条の鴨川で露天試写したことから始まる。映画製作も、

京都のマキノ省三が、明治四十一年に横田永之助の委嘱を受けて「本能時合戦」を撮影をしたのが最初である。明治四十二年には尾上松之助出演の「基盤忠信」が作られ、京都で最初に映画スターが生まれた。

大正時代の末期から昭和初期は、尾上松之助に代わって林長二郎（長谷川一夫）、阪東妻三郎、市川右太衛門、嵐長三郎（嵐寛十郎）、片岡千恵蔵、大河内傳次郎などの六大スターが無声映画黄金時代を形成した。

太秦に撮影所が出来たのは、大正一五年に竹藪を切り開いて作られた阪妻プロダクション撮影所が最初である。それまでは太秦村の八丁藪と呼ばれていたところであり、屋なお暗き場所であったと言う。現在の東映京都撮影所である。昭和三年には、日活太秦撮影所（後に大映京都撮影所、現在は太秦中学校やマンションに変身）が作られる。昭和八年には、大沢商會がJ・Oスタジオ（後の東宝京都撮影所、現在は大日本印刷京都工場）を、昭和一〇年にはマキノトーキー撮影所（後の松竹太秦撮影所、現在の京都映画撮影所）が作られ、太秦は日本のハリウッドと呼ばれるようになった。

戦時体制下、映画界は、再編成を迫られ、当時の松竹、東宝を除く日活、新興、大都の三社は合併して大映を設立、東宝は京都の撮影所を閉鎖した。

戦後、映画館に人が戻ったのもつかの間、占領軍のCIE（民間情報教育部）は、チャンバラ映画を禁止し、各映画会社は打撃を受けた。刀を捨てた片岡千恵蔵は多羅尾伴内シリーズで活躍する。

映画会社での労働争議が激しくなり、特に東宝は戦車や飛行機が出勤するまでの騒ぎとなった。しかし、この騒ぎの中で、昭和二五年に大映京都で製作された黒沢監督の「羅生門」が昭和二六年ベネチア映画祭でグランプリに輝いたのを始めとして、溝口監督の「雨月物語」、衣笠監督の「地獄門」が次々と賞を獲得し、日本映画は世界的に注目されるようになった。

また、大映の撮影所を借りて昭和二六年に発足した東映が、「ひめゆりの塔」でヒットし、「大菩薩峠」、「旗本退屈男」など時代劇で業績を延ばし、わずか五年で業界随一の実在となった。最初のシネマスコープ作品「鳳城の花嫁」も東映京都で製作される。

昭和二九年には、映画記者会と京都市が協力して第一回京都市民映画祭が開催され、これは昭和五二年まで二三年続いた。

しかし、昭和三五年の五四七本の製作本数と七四五七の映画館数をピークにして日本映画は衰退期に入る。観

客数も昭和三三年の一一億三〇〇〇万人がピークである。昭和二八年に放送開始されたテレビによる影響で、地滑りの観客数は減少し、凋落傾向は現在も続いている。一九九一年の日本映画公開数は二三〇本、映画館数は一八〇四館、入場者数は一億三八〇〇万人である。

映画会社も倒産、縮小に追い込まれ、昭和三六年に新東宝が、昭和四六年には大映が、昨年は日活が倒産した。京都の撮影所は東映と松竹（京都映画）だけとなった。東映は、昭和五〇年に開所した東映映画村が予想以上に成功し、撮影所閉鎖の危機を免れた。

●
現在の京都映画界は東映と松竹（京都映画）の二つの撮影所がテレビ映画の時代劇で息をつないでいるのが、現実である。

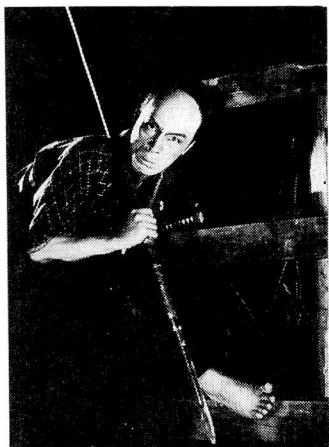
しかし、安い予算で短期間に製作しなければならないテレビ映画は、昭和三〇年代の大量生産時代と同じように、じっくり腰を落ち着けて傑作を作ると言う京都の活動屋精神を荒廃させてしまう危険がある。

それでもまだ多くの「活動屋」たちが、太秦に腰を据えて機会を狙っている。映画の観客の減少もブレイキがかかりつつある。京都には京大人文研を中心とした「日本映画を見る会」の伝統があり、また、映画鑑賞の市民団体も健在である。いい日本映画が生まれるのを皆が待っているのだ。頑張れ！太秦の活動屋たち。

映画都市・京都

座談会

いま、潜行期を生きる



出席者各氏

- 平田 博志 — 映画監督
TV時代劇を中心に活躍中
- 井上 茂 — 俳優
TV・映画等に多数出演
- 岡田 榮 — 映画ファン・旅行社社長
- 小野恵美子 — 女性監督を聞き書きした主婦
- 高橋 幸子 — 司会（本誌）

フリーでやってはいるけれど

司会 イタリア映画で『ニューシネマパラダイス』というのがありました。シネマパラダイスとしての京都を、これからにむけて、もう一度見直してみたいということが、今回の特集のねがいです。映画というのは東京のほうに全部うつってしまっただけで、京都は滅びるばかりという印象がなんとなくあるんですが、実際のところはどうか。直接映画の制作にたずさわっておられるかたがたを中心に、いまの映画づくりをとりまいている状況や、これからの見通しについてお話をうかがいたいと思います。まず自己紹介をお願いします。

井上 はい。ぼくは井上茂といまして、俳優歴、かなりやってまして。最終的には、劇場映画のなかで、一生懸命、自分の肉体とか心をすべてだききってやりたいですね。ちっちゃい頃にみたワルの月形龍之介さんとか、進藤栄太郎、山形勲、あという名脇役に自分が育って、なっていけたらいいと思いますね。最近では『大岡越前』で小松政夫さんと組んで越前をいびる役をやって、途中からペコペコする役にかわって消化不良をおこしたり（笑）。『暴れん坊将軍』では、め組の「鉄」という火消しの役を長いことやっておりまして。

平田 平田博志です。もともと俳優をこころざしてい

ましたが、今は監督、やっています。『水戸黄門』の助監督などをして、いま『遠山の金さん』とか、京都市でやっている、教育映画のジャンルというんですか、『君に心のパス』というのを撮ったりしています。

司会 『水戸黄門』はいまも撮っておられるのですか。

平田 いえ。ずいぶん以前のことです。東映には、この撮影所のほかに「太秦撮影所」というもうひとつの事業所があるんですが、『水戸黄門』と『大岡越前』はこちらの方で制作しているんです。

岡田 私は東映撮影所への憧れが長いことありまして。祇園の飲み屋でそんな話をしていたことがきっかけで『銭形平次』のスタッフのかたと知りあうようになって、昭和四十年代の後半ごろから会社のあいまをぬって撮影所に遊びに行くようになりました。

小野 小野と申します。福王子のほうに住んでおりまして、映画関係のかたが沢山いらっしゃったものですから、



井上 茂氏



平田 博志氏

えー野口 良平

自然にそういう雰囲気になじんでしまったようです。

司会 それでは、撮影所に対する関わりかたについて、お話しをおうかがいしたいんですが。みなさんは、正社員ということになるのでしょうか。

井上 はじめは社員でしたが、のちにやめてフリーになりました。だから、ひとつの作品をもらうことで、一本いくらという契約です。その金額というのは、売れるか売れないかの問題です。野球の選手と似たところもありますが、映画の場合、契約更改とかの話合いはないですね。独断と偏見で決まります。フリーの立場をえらんだのは、流されて気のすまない仕事をしたくないからです。そういうところで頑張ってきました。

平田 私の場合も身分的にはフリーなんです。一応東映撮影所で仕事をしてはいるんですが、一般企業的な意味での給与というものはないので。

司会 監督という地位は誰が決めるわけですか。

平田 それは、プロデューサーとよばれる人たちが、企画の段階で、監督としての過去の実績や助監督としての仕事ぶりをみて判断するわけです。監督にしても助監督にしても、もともとは演出部というところに所属する社員という形をとっていたわけですが、最近になって会社の流れがかわって、フリーという形で仕事をする人の割合がふえてきて、監督も例外ではなくなったわけです。

司会 監督になりたいと希望している予備軍のひとつ

は、いま、どの程度いらっしゃるんでしょうね。

平田 京都だけでなく、東京、全国を含めて、助監督やってる人たちは、みんな監督やりたいわけですよ。昔だったら、徒弟制度のようなものがあって、巨匠とよばれる監督さんが自分のもとで長年助監督をやってきた人を抜擢したり、あいつはいいぞといった具合に推薦したりということもあったようですが、そういうことは少なくなってきたようです。そのぶん興業成績や視聴率、映画評論なんかをふくめた一般的な評価のほうが基準になってきているという状況じゃないかと思っています。

井上 テレビの場合、流れますよね。流れたその日に偶然視聴率が悪ければ、評価も悪くなっちゃうわけですね。こいつは視聴率かせげる、こいつはかせげないみたいな感じで、作品のよしあしとは別に監督が評価されてしまうということが、まず多いですね。いいものを撮っているなあという時代ではないと思うんですよ。やっぱり、そぐわなければだめな時代なんです。

撮影所においてはというのは独特のもので、すごくいいんですよ。ぼくら役者からすると、そんななかでカメラの前にたって芝居して、「いいカット」を撮ってもらうことが最高の喜びなんです。「いいカット」というのはいい顔ではなく、動きのなかでね、自分の躍動的なものを撮ってくれるわけです。そういうカットを撮ってくれる監督にめぐりあうと、それだけで嬉しいですね。

司会 でも、報いられないことってありますよね。

井上 報いられないということは、多いのじゃないですか。ぼく長くいますけど、報われたという感じはないですね。

平田 それは、映画にたずさわっている人にとって、承知のうえみたいなところがあるかもしれません。俳優に限ったことではなくて、表方、裏方も含めて。

司会 そうはいつでも、わかっている人のあいだではわかってるような、そういう評価というのも一方ではあるわけでしょう？

平田 それはあります。ただ、別の問題も現実としてはあるんです。つまり、価値観そのものが多様化して、どういう作品がよいものなのかということについて、ひとつのもののさしではかりきれない状況になっている。そういう状況にも対応していかなければならない。

司会 なるほど。でも、それは、視聴率さえよければいいというのは違うことですよ。現に、テレビのスポンサーだって、視聴率だけで動いているわけではないという話をききました。つくる側も話し合いや説得をくりかえしていきさえすれば……。

平田 スポンサーにもいろいろあるというのは、その通りだと思います。ただ、撮影所としては、テレビ局からの発注をうけて仕事をするしかないわけです。

司会 いまはテレビ作品のほうが主流なんだろうが、

映画館の映画のほうはどうか。

平田 数からいいますと、京都地区の場合年に五〜六本でしょうね。東映というのは、御存じの通り東京にもあります。そこでも劇場用の映画をつくっていて、トータルすると年間に十二〜十三本ぐらいですかね。

岡田 それとはべつにマンガ・プログラムがあります。

これはほとんど外注になっていて、お金だけだして、スポンサーをつけて、ということですよ。

司会 映画が主体だったころのことをおうかがいしましょうか。

蜜月はおわった

岡田 昭和三十年代ですね。日本映画の入場数がいちばん多かったのは昭和三十三年で、その年は東映でも六十本近い映画をつくっていました。そのころは、敷地もいまの三倍くらいは広がったんじゃないでしょうか。

井上 東映城という本当のお城があって、本当の日本橋があったんです。

司会 本当の日本橋（笑）。

井上 いや、そういう意味じゃなくて、お城も日本橋もいまの縮小されたものではなくて、実寸で建ててあったという意味です。

司会 お金もずいぶんかけられたんですね。

平田 ええ。ただ、そのころはすでに劇場映画が下火の時期だったんです。で、逆に予算的には大作志向になってきたんですね。一作に何千万単位のお金をかけて、いまのテレビ映画の感覚でつくっていたのです。

岡田 そのノウハウがいまも生きていて、四〜五日とか一週間でテレビ映画をつくらたりできるわけです。

平田 B級作品の場合は、十日間で劇場映画を撮っていましたからね。

井上 B級というのなんだからおかしいけれど、いまテレビや映画で活躍している人たちが、四十五分くらいの映画で主役をやっていました。レコードのB面みたいなものです（笑）。

岡田 もともと、昭和二十年代までは一本立てだったのです。それがだんだんと、とにかくようさん見せたらお客さんがよろこぶ。質より量ね。食べ物もそういう時代がありましたね。映画もそういう時代があったのです。



岡田 榮氏



小野恵美子氏

司会 そういえば、三本立てなんていうのもありましたね。五十五円で（笑）。

岡田 質が量に負けるんです。大映や松竹あたりは、昔から一本か二本でやりたかったわけです。そしていい映画をつくりたい。でも、お客さんの数のほうにひきずられて映画界全体がうごいていく。

平田 でも、そのころの映画のロマンというのは、続きがありましたからね。そんつぎどや、というね。

司会 ひめゆりの塔に七つの誓い、あのあたりはすごかったですね（笑）。

岡田 『ひめゆりの塔』は東映を救ったんですよ。そのころの東映はもう倒れる寸前だったんです。ああいう映画でもヒットするんですね。だからなにがええかわからんけど、ああいうまじめな映画がヒットして。

司会 当時は、私なんかの経験では、毎日といっていいくらい、将軍塚にバスが上っていったね。

井上 将軍塚 ああいいですね。

司会 しょっちゅうロケーションをみました。生活の一部という感じで。ホンマモンの発砲事件がおこっても、ああ映画か、と思ったりしてね（笑）。

平田 その時代はね、やはり住民のかたたちが映画に対して寛大だったんでしょうね。ああやっとなるなあみたいな感じでうけいれられていたんでしょうね。いまじゃそうはいきませんよ。ロケーションなんかやっていても、

迷惑がられることが多いですね。

岡田 サンフランシスコ、ロサンゼルスでは、市警ができてくれて、車を反対に走らせるようなこともする。しかも高速道路で。「皆さん映画を撮りますから協力しましょう」と。サンフランシスコ市役所には市民映画課という、映画に協力する課であるんだそうです。

司会 京都の気風の問題に関わってくださることもかもしれませんね。学生運動だってね、外でわいわいやって、あまた学生さんが暴れてはるわあみたいな感じで、風景としてゆったりうけいれてしまうような。

平田 ええ。ただ、実際問題としてロケーションがやりにくくなっているというのは確かなことなんです。たとえば、お寺を借りるときに払わなければならない謝礼というのがあるんですが、これが年々値上がりしていくんです。お寺のほうもだんだん強気になってきて、去年まではこれだけの金額だったけれども、今年はこれだけ出さないと貸してくれないというようなことがあります。

岡田 ただ、平田監督の先輩の時代なんか、ムチャクチャにやってたときもあるのです。庭をぐちゃぐちゃにしたり、廊下を汚したり。

平田 それがあるんですね。やはり鼻が高くなって、映画関係だ、というふうの特権意識をちらつかせたりね。それでいっさい貸さなくなったというお寺さんもありますね。

映画はゆっくりゆっくりたい

司会 映画づくりを支えている技術についてお話をお聞きすることにします。さっき、メイクとか衣装、カツラなんかをじっさいに見せていただきましたよね。あのへんのを昔からまとめてうけおっている業者があるようにうかがっているんですが。

岡田 高津商会ですね。初代はマキノ省三さんとおなじくらいのお年です。マキノさんに「これは将来、あなた一代のお金になりますよ」と言われて、大道具やら小道具をあつめはじめたのが最初らしいですよ。いまやもう高津さんしかあらへんから。

司会 リース業のはじまりみたいなものでしょうか。



井上 ただ、撮影所にもあったんですよ、焼けましたけど。衣装だって、倉庫には、時代劇の初期のころの衣装はみんなありますからね。市川右太衛門さんが『旗本退屈男』でつけた衣装なんて、虫もくわずにのこっているんです。

司会 映画って、ある意味では全ての部門に関わっているでしょう。大工さんの仕事もあれば、ペンキ屋さんの仕事もある。全部の部門に関わる一つの世界ですよ。

岡田 これだけいろいろな人が集まってひとつのものをつくるというのは珍しいでしょう。そのへんが総合芸術やから。テレビと映画は似て非なるものだと思います。映像のもつ意味が違うんですね。

司会 京都には、町内に何人かは映画に関係している人がいたんですね。女優さんとか監督さんとか表の人だけじゃなくて、さまざまに関わる人が。

井上 そうですね。京都は絶対にそうですね。隣近所にね。ただ、そういうのはやはり、なくなりつつあるんじゃないですか。映画そのものが、京都の片隅においやられているのではないかと思うんですよ。

司会 でも、糸口はありませんか。伝統のネットワークがあるわけで。高津商会が倒産するとか、そういう可能性はまず……

井上 ないでしょうね、それは。

岡田 映画が倒れたとしても、高津商会は倒れない可能



司 会

性があります。テレビで映画をつくっていたら、フィルムの映像はなくなったとしても、ビデオの映像はあるでしょう。だから、規模の縮小はありうるとしても、需要がなくなるといえることはないと思います。

井上 いま、現場にはいろんな問題があるんですよ。たとえば、チャンバラでからみのできる人、斬られ役ですね、それができる人がだんだん少なくなってきたということです。いま、からみで活躍しているのは、だいたい五十代の人たちですね。それにづく人たちがいないですよ、できる人がね。刀もってチャンバラごっこでできる人たちはいますけれど、ほんとうにチャンバラの型を知って、斬られかたも知って、人間の心も知って、主役に斬られてみせるという人が、いなくなりましたね。

かつらもそうですね。かつらで羽二重を合わせる人はいますけれど、かつらをつくって結える人が、若手でそだってきません。それに、刀を一本はりかえる人もい

い。ある小道具のことをさして、監督さんが「これもってこい」といっても、その意味が分からない人は多いでしょうね。急には無理なことなんですが。

司会 テキストでは育ちませんよね、職人さんは。

井上 ええ、そうです。現代劇でしたらそのまゝいけるところが、時代劇ではそうはいかないわけです。全体として、素材となる人や技術が育たないですね。いまはだから、年寄りをつかってやるしかない。

司会 時代劇に特有のメリットをほりおこしていくという方向も考えられますよね。ボン、とウソの世界にとんでしまうことで、かえって自分のおかれてる現代の世界とだぶらせていきやすいということが、時代劇にはあるような気がするんです。

平田 時代劇にはもともとオブラートとしての性質がありますよね。そういう特性があるかぎり、なんらかの形で時代劇の可能性は残っていくと思います。

小野 あの、ことばのことです。こし気になっていることがあるんです。テレビのドラマなどを見ると、べつに時代劇にかぎったことではないのですが、じっさいに話されている感じとどうも違うのではないか。現代のことばにしても、昔のことばにしても、とくに方言などが使われる場合には、あれは違うわ、と思うことがよくあるのですけど。

平田 それは、ひとつには時間の問題があるのではない

でしょうか。映画にしても、テレビドラマにしても、つくる回転がものすごく速くなっていますね。方言ひとつとってみても、速い回転のなかですから、なかなか徹底した指導や訓練というのは難しいのです。どこか中途半端な段階で終わってしまうわけです。もちろん、最大公約数のお客さんを対象にどこまで忠実さをもとめるべきかというような問題もからんでいるんですけどね。

岡田 テレビのペースに全体がひきずられていて、ゆったりとしたペースで制作しにくくなっているというのが一番の問題ですね。以前やったら、溝口さんやったら一年に二本とか。それにあわせて俳優さんも自分のペースをつくっていくことができる。

平田 よりよいお芝居をするために時間をかけられるわけですね。

岡田 それは、ギャランティー（保証）があるわけですから。ギャランティーしないとそれはできない。ところがギャランティーしてくれまうかというリクエストがあったら、それはしないですよね。

平田 よくないことです。

小野 坂根さんに（二九頁参照）うかがったお話を思い出したんですけれども、溝口さんの作品でやっているときに、枕ぶすまというのでしょうか、ついたてがあつて。

平田 枕ぶようぶですね。

小野 女優さんがそれを、ずっとただ動かすだけで一日

かかってしまつて。それでもダメで、翌日はじめてOKがでたんですって。

井上 ゆっくり撮れる時代だったんですね。ゆっくり撮れる時代だったから、それだけゆっくり見てくれるお客さんもいたということです。ぼくら、やっぱり教えてもらいたいのです、いくつになつても。そして、自分にないものを演出してほしいです。そういう時代は、もうなくなりつつあるということでしょうね。

もうひとつ、いまと昔とでちがうのはね、なんといつても俳優さんというのは夢、スターやっただんですね。いま、夢じゃないですね。個人の所有物でしょう。俳優さんも、あんまり私生活をみせないで、夢をみせてくれるからこそのいいお金もらえんやから、そういうのに徹してほしいですね。ぼくら映画館でスターをみて、それで自分の人生観が変わってきたわけですからね。それがなくなつたから映画館いなくなつたんじゃないですか。

司会 昔祇園でね、大川橋蔵と真理子さんがね、なんやらこんやらいうてね、それが、スクープされるといふのではなく、みんな知ってるけど黙ってるところがありましたが、いまはフライデーやらなんやらですぐスクープされてねえ。べつの意味の民主主義で、みんなおんなじにしてしまふ。

平田 民主主義で、言論の自由とか報道の自由って言うけれども、ちょっと、いまのマス・メディアそのものが

ね、異常ですね。

岡田 やっぱりベールに包まなあかところはあるんや
というね。

井上 それがじっさいにいい芸につながっていったんだ
と思いますよ。ぼくら、なくなる前の長谷川一夫さんに
東映撮影所でお会いしましたけどね、やっぱり後光がさ
してるみたいでふるえましたもんね。

司会 役者さんというものが、カタギの仕事ではな
いってこういう感じでみられていてね。遊び、道楽やと。そ
れが、どういうたらしいのかな、逆に、役者さんにして
も、監督さんにしても、謙虚にしたと。いまなんか、有
名人だというだけでもちあげられてしまってる。

井上 いまは誰だって有名になれますよ。昔きれいかっ
たもん。女優さんなんて、ほんときれいかったもん。プ
ロですよ。東映娯楽時代劇なんか見るとね、踊ってるひ
となんてみんな美人やもん。やっぱそれ、夢ですよ。あ
の美人と出会いたいというのがね。いま、踊ってるど
かつくもん。あれが茶の間にくるんですからね、どんな
むかつくか。

平田 映画館に足を運ぶというのは、日常では見ること
のできないものを見に行くわけですよ。ですから、映
画にでてくるものが、日常とあんまりにもかわりばえの
しないものばかりになってしまったら、お客さんも入
らなくなっちゃうということです。

放電してたまるか

司会 ただ、どんなふうに被写体をいかすか、という点
に関しては、監督さんのもってる力も大きいということ
はいえませんか。

平田 ううん……。映画監督というのは最終的には表に
でてくるわけですけどね。映画監督というかたちで。
ただじっさいに制作のプロセスをさかのぼってみるとね。
まず第一に企画、つまり筋書きの決定ですよ。この段
階でほぼ流れが決まってしまうとっていいんです。で、
そのつぎに役者がきて、三四がなくて最後にやっと監督
と。じっさいのところはそうなんです。

司会 企画というか、発想の段階で、なんらかの制約を
うけるということもあるんでしょうね。時代劇ミュージ
カルなんていうのもあったわけでしょう。美空ひばりが
とつぜんうたいだしてしまうとか。

平田 もういろんな制約があるんですよ。発想や手法
のうえでも、なにかに縛られているんですよ。つくり
手の側が、自分で自分のワクをつくっているということ
はありますね。アイデアさえあれば、それをいかす余地
はあると思うんですけどね。

司会 アイデアをうみだすモトの部分について考えてい
くと、映画館というのは、親も先生も教えてくれない

「悪所」だったわけですね。その悪所が色あせているということがありますよね。

平田 ただ、社会がかわってしまっ、昔ふうの、いい意味での悪所というのはノスタルジーにすぎないというような側面もでてきたわけです。劇場のありかたも、ごみごみとして汚らしいものよりも、さっぱりとしたきれいなイメージがもとめられるようになってきた。

司会 そういう社会の動きと、二世化というのか、俳優さんが世襲制みたいになってきて、一般から育ちにくくなっていることは……

平田 関係あるでしょうね。それともうひとつ、映画会社金がかけて育てなくなったということでしょうね。

井上 アイドル、二枚目はいるんだけど、パイプレーヤー、悪役はなかなか育たない。ワルがいけないというのは、時代劇としてはまったくダメですね。ワル、というものを根本的に知らんということでしょう。いまの子たちは、悪いこと平気でやってるんですよ。それを悪いと思わないだけで。

小野 ああ、そうですね。

岡田 だんだんもとめられる人物像が複雑になってきている。つくるほうとしても、そういう人物像をとらえていくというのは難しいですよ。

平田 それが、さっきでた企画の問題なんですね。

司会 でも、京都には、そういう人物像なりなんなりを

とらえていけるような、そういう土壌だってあるかもしれない。

井上 京都人、京都という風土をぜんぶまきこんではじまったのが時代劇ですよ。

岡田 となりの京都映画では、シナリオの人とか監督さん、俳優さんをそだてていこうということ。

平田 できましたよね、映画塾が。

井上 でも、彼らが現場に出てきたとしても、いい人に出会えるかというと……

岡田 そりゃできんよなあ。

司会 閉塞した状況を打開するために、サークルとか集まりをもたれているようなことはありますか。

平田 とくべつに集まりをもつということはないです。

日常のつきあいのなかで、映画人のそれぞれがやっていることだとは思わんですけどもね。

司会 いまは潜行期というか、力をためている……

平田 ええ。要するに、どこか完全燃焼できない部分がある。それは、おそらく、いま日本映画にたずさわっている人たちに共通の問題ではないかと思うんです。もしかすると、この先、死ぬまでのままの状態でいってしまうのかもしれない。

井上 だからいまは、たっぷり充電して、放電しないように(笑) がんばっていかないとね。

(記録・塚崎美和子 まとめ・野口良平)

映画を

支える人達

はれやかな映画の世界は、多くの職人さんの陰の力で支えられている。東映京都撮影所でこの職人さんたちにインタビューしてみた。

殺陣師・上野隆三さん（56歳）

時代劇で一番大事なのはチャンバラの場面。殺陣師はこのチャンバラの振り付けをする仕事。上野さんは、一九五六年に東映に入社し、一年半ぐらい役者をしてから、師匠に言われてこの道に。当時は映画の全盛期。

上野さんり仕事は振り付けと言うよりも、チャンバラや格闘場面の演出と言う方が正しい。監督からはその場面は任されることが多い。

舞台と違うのは、様式美ではなく、いかにお客さんを楽しませるところにあると言う。「時代劇のチャンバラ場面をリアルなものに変えたのは僕らだと自負していますね。それまでのチャンバラは奇麗だけを見てい

ていやでしたね。」

上野さんはそのために、あらゆる流派の剣術、槍術、棒術などの道場に通った。空手を習いに沖縄まで行ったこともある。チャンバラだけではなく任侠映画の格闘場面も上野さんの仕事、ピストルやあい口も扱う。

真剣は今では使えない。竹光を使って音は擬音である。最近の死亡事故以来、使用禁止のお触れが回っている。「昔は、大河内傳次郎や丹波哲郎は禁止なのに真剣を使っていたね。怖かった。」

チャンバラは切られ役も大事。東映では切られ役の役者が「剣会」という名前で集まり、研鑽を重ねている。

上野さんはその指導役。

上野さんは東映では事故がないことが自慢。もちろん骨折程度の事故はあるが。これは、事前にチェックをして十分気をつけているからだ。

チャンバラの演技の練習は撮影現場で何分かするだけだと言う。「東映は慣れた俳優が多く、時間はかからない。ちよつと言えはやってくれる。全員指導したら時間がないよ。」

現在、五人の殺陣師がいるが、問題は後継者。「希望者が来るけど、育ててみても映画の将来があるかと考えるね。後は知らないとは言えないしね。この間、弟子入りしたいと言う医学生がいたけど、怒ってやったよ。」最後は寂しい話となった。

メイク・鳥居清さん（59歳）

鳥居さんは一九歳の時にこの業界に入った。企画の仕事をしたかったが、たまたま空いていた仕事メイクアップの仕事で、そのまま現在まで四〇年。

仕事は、顔のメイクアップと枝髪。枝髪と言うのはカツラの髪を結び上げる仕事である。女性の場合は結髪と言う。東映の場合、カツラ自体は山崎かつらから借りているが、髪形を作るのは鳥居さんたちの仕事。現在東映には二二人のメイクの職人さんがいる。

台本が来ると、時代に応じてカツラを決める。どのカツラにするかは、資料を見たり、先輩から教えられて覚え込んだ。元々は歌舞伎から来ているのでメイクもカツラも一定のパターンが決まっているとのこと。

今の仕事はテレビ映画が多い。しかし、テレビは時間がなくて、決まるのは前日ぐらい。ほとんど、監督から任されてしまうそうだ。

刀に切られて、血潮がドバツと飛ぶ仕掛けも、メイクさんの仕事。「先輩が変なことをしてしまったために、血糊を仕掛けるのは私たちの仕事。大映などは美術の職人がしていますね。ただ、ピストルを撃たれる場合の仕掛けは、又別な職人の仕事です。血糊が付くと衣装部が文句を言いますね。最近は洗って落ちる血糊があります」

鳥居さんの印象に残っている映画は、日本最初のシネマスコープ作品「鳳城の花嫁」。「画面が大きく感動しました。けど、松田監督は非常に丁寧にまた細部まで気を遣って作っておられましたね。実は、その少し前にカラー映画が作られ始めて、白黒映画の時の濃いドーランが出来なくなり、カツラの合わせ目がごまかしくなくなって、いまして、この映画を作る頃はまだ十分解決していなかったので苦労しました。」

エキストラ・岡野京子さん

岡野さんの仕事場は、撮影所の隅にある小さな部屋。名刺にはマスプロダクションとある。パートタイムの役者さん、エキストラの幹旋業務が仕事である。ここに五人ぐらいの役者さんが登録している。いずれも、立派な玄人である。この京都では俳優養成所の卒業生もいるので、通行人などのチョイ役でも役者さんはそろっている。撮影の前日ぐらいに連絡が入って、すぐに必要な役者を揃えるそうだ。

群衆シーンなどのエキストラは学生相談所などに幹旋を依頼する。しかし、最近はそのような映画は余りない。昨年ではテレビ映画の「忠臣蔵」、「織田信長」ぐらい。かつて撮影したフィルムのコピーで済ませることもあるそうだ。

しかし、学生もなかなか集まらないという。日当は八

時間拘束で五九〇〇円、それに交通費が六〇〇円。少ないようだが、撮影が早く終わっても支払いと同じだ。登録している役者さんの手当は、会社が決めているランクがある。演技力と年数とか。東映の場合には映画村の仕事もあるので若手のフリーの人は恵まれている。

小道具・西田忠男さん

東映京都美術センター企画営業室長の西田忠男さんは、今は予算関係の仕事をしているが、三六年間現場で小道具を担当してきたベテラン。

ここには二〇名の小道具担当者がいる。

撮影所の中にある小道具の倉庫には、刀、提灯、駕籠、食器などありとあらゆる小道具が並べられている。

小道具係は台本を見て必要な物を判断する。ない物は外注したり、自ら作ったりして揃えなければならない。

しかし、時代劇に必要なほとんどの物は隣にある高津商会に行けばそろっている。九〇%は高津商会からの借り物だとのこと。

テレビ映画の場合はパターンが決まっているから、余り苦労することはないそうだ。映画の場合、時には、時代考証の専門家に聞かなければならない時がある。

「印象的な作品は『魔界転生』『鬼電院花子の生涯』などですね。小道具に凝って徹夜が続きまして。監督では深作さんとか、工藤さんが小道具にうるさかったですね。」

ね。数え切れないほどの映画に関係してきましたが、やっぱり、映画の内容そのものよりも、小道具で苦労したことで覚えていきますね。」

スタントマン・宍戸大全さん（63歳）

日本のスタントマンの元祖と言うべき宍戸大全さんが、たまたま打ち合わせで来ておられたので、東映撮影所の食堂でインタビュー。

大全さんは、一七人のスタントマンをかかえる「大全グループ」の総帥。そのうち五人は佐賀県の忍者村にいる。殺陣は「地上だけでなく、僕らは空中から降りて来てズバッとやるんだ。」

大全さんは大学卒業後、高校の先生をしていた。機械体操でオリンピック候補になったこともある。この道に入ったのは、長谷川一夫から頼まれて「子の刻参上」の撮影を手伝ったのがきっかけ。

その後、市川雷蔵の「忍びの者」を手伝うことになって、これが大ヒット。あちこちから声がかかるようになって、先生を辞めてしまった。



大全さんがこの世界に入るまでは、怪我人が続出で、ランポリンとかの防護も用意されていなかったと言う。スタントマンと言う職業もなかった。この仕事に入って、伊賀流一三世に弟子入りして、忍術を習う。

「他のところでは死んだ人もいますが、私のところは死亡事故はないですね。擦り傷程度は当たり前ですが。」

「危なかったのは、僕のグループの人が、忍者のスタントマンで三〇メートルの樹の上から降りれなくなった時ですね。消防車のハシゴも届かなくて、僕が助けに行きました。火のシーンも怖いですね。化繊だと一秒で発火しますが、木綿だと防火塗料をつけると三〇秒持ちます。石綿や防火塗料を使って綿密に計算してやらないと。」

大学の同期の友人が大学教授や校長をしているのと、今はこの業界に入ったことを後悔しているとおっしゃるが、顔は全くそうは言っていない。

大全さんに弟子入りたい人のために、連絡先は〇七五―四六一―一四七七。

衣装・下村千里さん

下村さんは一九七五年入社。当初から衣装、着付けの仕事で現在に。映画の衰退期で専らテレビ映画の仕事、映画の仕事は責任者として担当したことがないと言う。

衣装係は七人の裁縫さんも含めて三〇人の大所帯。女性にとって大変な職場だと言う。

「映画での、女性の仕事は衣装、記録、編集に多いが、最近小道具でもいます。しかし、それでも女性が少ない。すぐに女のくせと言われます。しかし、いい衣装は結構取り合いになりますから、男性に遠慮していると仕事になりません。倉庫から衣装を運ぶのも女にはしんどい仕事です。」

台本を読んで監督さん、カメラマン、記録さんらと衣装合わせをするが、それが撮影の二日前ぐらい。下村さんも衣装係としての意見をぶつける。

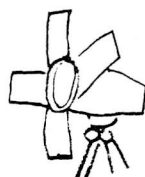
衣装は、時代劇用の衣装が倉庫に四つ分ある。衣装係をやっていると、誰が何時どんな衣装を作ったか頭の中に残っていると言う。どの時代にはどの衣装かと言うことも覚えてくる。着付けも芸者と町娘とは襟の抜き方が違うが、そんなことも体で覚えてくる。

衣装を新しく作る時は大体反物から。映画の場合で時間がある時は、染めを頼むこともある。「本当はそれが一番良いけれど、染めて縫い上げたら一〇日は必要だから、普通は到底間に合わない。」家一軒は買えるような豪華な衣装もあるそう。

大スターに対しても、ドキドキすることはない。「一緒に仕事をしている仲間という感じがですね。あがったりしていたら、仕事にならない。俳優さんも、この東映では身内みたいな形でわきあいあいとしていますね。」

(折田泰弘)

● ライトマンの現場 ● 集力とチームワーク



東映映画ひとすじ30年余
藤岡弘次郎さんが語る

★撮影の集力

四年前に、なんと勤続三〇年を迎えました。青春期は裕次郎や小林旭の全盛時代（あれ！日活ですね）、そりゃ映画はよう見ましたが、東映に入社したきっかけは親父の友人に誘っていただいて、たまたま。

あれから照明の現場におよそ十五年。今は関連事業室にいる責任者の一人というわけですが、本社は東京で、京都は映画をつくるいわば工場ですから、その意味で現場ひとすじといえますね。

この世界も昭和五〇年あたりから大きく変化しました。フィルムも高

感度になり、照明器材もヨー素ガスを入れたライトの登場などです。いぶ軽量化されましたよ。

映画とテレビ、照明装置のちがいはね。テレビはセットがマス目（四角）に固定されていて、ライトもまっすぐ下りてくるんです。一方、映画は光線が四角に入らない、つまりナメから当てたりして、だからひとつひとつのセットは手作りです。

ライトの設営や足場作りなど、準備作業そのものは下請けの会社に任すんですが、その構図を指示する係とかネ、こまかく言えば最後に電源を切る係とかネ、キチンと体制を組まないと事故にもつながるし、仕事も進行しませんから、チームが一体となります。たとえば、テレビの場合なら、助手がホースとサードとセコンドとチーフ。この四人がいわば手足のように動いて、照明技師がいるんですね。映画ならあと二、三人つきます。だから、どの仕事だってそうでしょうが、撮影現場の集力

というのはみなスゴイものです。

★一人前になる基本は時代劇

時代劇映画のライトマンができれば一人前、とよく言われます。現代にないものをつくりあげる仕事でネ。夜の食事風景ひとつでも実は電気はなくて行燈の灯ですから、キャリアを踏まないことにはできません。

今も照明の技術者は二〇年以上の熟達者ばかりですが、ここにかけては百人ぐらいいました。今は十人ぐらいの専属で、あとはフリーの人達です。しかし仕事が空いては困ります。連絡とって仕事の確保など、生活費の保証も必要、いやそれこそ管理者側の役目と思っています。テレビの一時間ものを七、八日間でつくるとして、労働組合との協定で労働時間の問題もありますから、各個人のスケジュール調整も大切ですね。

映像産業というのは不滅な部分があるでしょ。とくに技術の継承もしていきませんとね。十年ぐらい前か

なあ、映像関係の専門学校歩きをしましたよ。その人材がいま別会社ですがね、京都に三〇人ほどいます。

舞台照明の方は女性の技術者も増えてきました。映画塾が養成したりして。昼に設営、夜は本番、そのあと片付けて次へ運搬と、かなり重労働ですけど、たとえば松田聖子の照明家なら誰々と決まってまして、みながんばっています。

★面白さは毎日変化

映画一本で使う電力は、三万キロから三万五千キロワットですね。

「極道の妻たち^{おんな}」をみてみましょう。撮影現場で一万六千キロワット、タテコミ(セットを建てる作業)にやはり同じ一万六千キロワット、合わせて三万二千キロワット使ってます。

トータルの電気代ねえ……大口契約ですから割安ですが、映画村の方を含めて夏には一千万円ほどですね。シーズンオフは七、八百万円。ライトそのものより換気装置などにも多

く使うんです。第一スタジオで六ヶ所あり、一ヶ所に十キロワットつきますから。

この仕事のおもしろさは、同じことを二度やらないってことかな。毎日変化があるんです。あるいは力を合わせてみんなで作っているという手ごたえ感。チームワークが大事、これが絵(画面)に出てきますからこわくてスリリングともいえます。

チームワークといえば三〇年余を振り返って思いつくんですが、昭和三〇年代の後半、マキノ雅弘先生(日本ラグビー球史に残る一人!)を部長としてこの撮影所にラグビー部が誕生しまして、私も学生時代は勉強よりラグビーが好き、でしたからはりきって。関西社会人Bリーグに加入、練習イコール試合。でもなかなかのチーム力で連戦連勝。故山本麟一さんや山城新伍さんもメンバーでした。これからも「映画の灯を消すな」をスローガンに熱く燃えたいです! (聞き手・高橋幸子)

大河内山荘

百人一首で有名な洛西小倉山の南面六千坪に、俳優故大河内傳次郎(一八九八―一九六二)が三十年の歳月をかけて造った庭園が、大河内山荘である。

一九三一年(昭和六年)、広沢の池から大覚寺のあたり、亀山公園と背中合せの地点に空地を千坪求め、以来三十年かけ少しずつ土を削り、家を建て庭を造ってきた。若い頃から信仰に篤かった傳次郎は、まず最初に持仏堂を建て、毎朝読経していたという。

映画の出演料のほとんどをつぎ込んだこの庭園は、趣味を超越し、彼にとり生涯の夢であり、芸術そのものとなった。

その後、六千坪にまで広められたこの庭園を訪れたことのある徳川夢声氏は「太閤秀吉以来の贅沢な邸宅」と感嘆したという。

東に比叡の霊峰、また保津川の清流も眼下に望めるこの山荘は、多数の松、桜、楓などが興を添え、傳次郎が生涯求めてやまなかった禅の境地そのものでもある。傳次郎はこの庭園の秋が一番好きだったようだ。

・庭園公開時間 午前九時〜午後五時
・会食 静雲亭 昼十一時〜十六時
・問合せ 京都市右京区嵯峨小倉山田淵町

TEL(075) 八七二二二三三三

『絶対に、よい映画を作るまでは…』

撮影現場の人々の生活と現状への思い

話

山下耕一郎 さん (全東映労連 京都撮影所労働組合副委員長)

村主 哲夫 さん (全東映労連 統一東映労組京都撮影所支部委員長)

現場を支える未保障契約者

映画やテレビドラマの制作現場を支えているのはフリーの技術者たちです。フリーと言うと聞こえはいいですが、その待遇は文字通り劣悪の一語につきまします。

今や現場の七割から八割はフリー契約者が占めているのですが、これは会社が映画産業の斜陽化にともない社員の合理化をすすめ、社員の採用をストップしてフリー契約者を増やしていった結果によるものです。

契約は映画、テレビドラマ制作一本ごとの「一本契約」で、身分は相当に不安定で厚生年金、社会保険の適用もありません。

従来社員労組しかなかったため、フリー契約者による労組を結成し劣悪な待遇を改善しようと奮闘してきました。会社側に訴え、また地労委に提訴するなどして、年契約を勝ち取ったりしましたが、やはり基本的

な状況は今も変わりません。現場は未保障の契約者が圧倒的多数です。

未保障契約者は仕事があれば給料がないわけですから安定した生活からは程遠い生活を強いられています。生活のためにエキストラやトラック運転などのアルバイトで収入を補っていますが、年間を通じて撮影の仕事に拘束されていますので到底補えるものではありません。

私たちは未保障契約者の悲惨な生活実態をビラで訴えたりしてきたのですが、それを読んだ方は本当に驚いていました。銀行の住宅ローンも拒否されるし、雇用保険すら適用されず、家族を抱えて大変な生活をしています。中には食費を切り詰めるため絶食したり、健康保険もないため骨折を自分で治すなどという話も聞きます。

私たちは映画づくりが本当に好きで、その技術者として打ち込みたいのですが、生活の基盤からそれがおびやかされています。

● 映画の危機に対して

大映や日活の例からもわかるように経営者たちは、労組が結成されると労組つぶしに躍起となり、経営が行き詰まると無責任に経営を放棄したりします。

私たちは映画制作にたずさわるものとして誇りもありますし、よりよい映画をつくり続けて行きたいと本当に願っています。

劇場映画の極度の不振が続いていますが、これは国民からそっぽを向かれてしまっているのだと言っていると思います。いつまでもヤクザ路線ではダメだということだと思おうです。ですから、私たちは一定の調査期間を設けて国民の見た映画、関心などをきちんと調査して、路線の転換をはかるべきだと主張しています。会社のワンマン体制のために、映画文化そのものも危機に瀕しています。

また社員として採用せず、生活の保障も与えないため、きちんとした映画制作の伝承ができていません。

優秀な技術者を育成することより、会社側は使い捨ての発想ですから、ますますよい映画づくりから遠ざかっています。「ジュラシックパーク」や「クリフハンガー」など見ても、映画はどんどん新しい技術に進んでおり、それにたちうちできる制作環境がどうしても必要です。

東映はバブル時代に手がけた不動産で今ひどい目にあっていますが、やはり本業である映像の仕事を大事にしなければいけないのは当然のことだったのだと思います。

● 世論の批判が映画を守る

京都は文化の町です。京都で生まれた映画という文化も、京都映像と東映撮影所の二つの会社だけになりました。文化と言うにふさわしい健全娯楽とは認めがたい映画やテレビ

に対しては、あらゆる機会を通じて率直な批判をしてもらいたいと思っています。マンネリズムや暴力の美化など、「おかしい」と思ったらどんな批判してほしいです。私たちは映像を愛し、そこにたずさわる者として「世論」を信じていますし、それが硬直した会社サイドを突き動かすことになると思っています。

そしてテレビドラマや映画制作を支えている未保障契約者の劣悪な待遇と奮闘を知っていただければと思います。

「会社がどんな攻撃をしかけてようと、決して撮影所から足を洗うことはしないでしょう。絶対に良い映画を作るまでは、どこい生きてやります！」

（労組機関紙から）

（山下さんはフリー契約者、村主さんは社員です。立場は異なりますが共同して組合活動を展開しておられます。団交前の忙しい時間、お話しをお聞きました。聞き手：原 祥雄）

映画製作・俳優を

めざす人たちのための

入所・入塾案内

— KYOTO・映画塾 —

京都は日本映画の故郷ふるさとと言われながら、映画界は斜陽の名のもとに、新人の育成を怠り、登竜門を閉ざして来た。このままでは日本映画が減びるとの危機感も生じ、ようやく、映画伝承のための後継者育成の拠点づくりがスタートした。KYOTO映画塾である。

二一世紀に向けて映画製作にチャレンジする優秀な人材の育成を目的に徹底した実習主義を貫き、カメラマン宮川一夫、木村大作、監督岡本喜八、小栗康平、篠田正浩など日本映画を代表する講師がプロの技を伝授、第一期、第二期の卒業生が現場ですでに活躍している。

プロデューサーコース六名、シナリオライターコース八名、ディレクターコース八名、カメラ・ライトマンコース八名、アートデザイナーコース五名、録音・編集コース五名の計四〇名を募集。(出願期間平成六年十二月二五日まで。) 修業年限・二年、入塾資格・高等学校卒業以上(卒業見込み含む) 年齢二七才まで。

● 出願先 千六二六 京都市右京区太秦堀ヶ内町二二一九

京都映画撮影所内 KYOTO映画塾

TEL (〇七五) 八六四一八六〇七

● 年間学費 前期納入塾費 七〇六、〇〇〇円

後期納入塾費 二〇〇、〇〇〇円

なお詳細は、KYOTO映画塾へお問い合わせ下さい。

— 東映俳優養成所 —

(TOEI-ACTOR-TRAINING-SCHOOL)

東映俳優養成所T・A・T・Sでは、児童劇団、俳優科、シナリオ通信科がある。それぞれ募集の詳細は左記へお問い合わせ下さい。

千六二六 京都市右京区太秦西蜂ヶ岡町九番地

東映京都撮影所内 TATS東映京都俳優養成所

TEL (〇七五) 八六二一五〇五三

児童劇団

・入所金 160,000円
・授業料 (1ヶ月) 15,000円
・年間総額 340,000円
毎週土・日 各1回 (1回90分)
月8回
内容
演技、発声、日舞、茶道

俳優科

・入所金 160,000円
・授業料 (1ヶ月) 17,000円
・年間総額 364,000円
各月間16回 4回 (1回90分)
内容
演技、発声、日舞、擬斗
俳優作法、メイク、着付
ジャズダンス、茶道

シナリオ通信科

・授業料 (年額) 40,000円
・教材 月1〜2回配本
・課題添削回答随時発送
内容
シナリオ概論、シナリオ創作論
シナリオの表現、展開、構造、
分析視点など
スクーリング 年3〜4回

坂根田鶴子さんのこと

日本で初の女性監督



小野恵美子

トゥモロー編集の仲間に加わって私は撮影所の門を入った。子供のころ通学途中に、銀板を持って撮影している光景をよく見かけたものだった。しかしスタジオでの撮影は、この年令になって初めてのものであり少々緊張も伴っていた。

二重扉の入口を足音をひそめて入ると、セットの一角にライトが光りひととき大きな声を出す監督らしき男性を目で探し、その傍でいつも記録しているというスク

リプターの女性の姿を追っていた。二十年前に聞かせてもらった坂根さんの後輩になるスクリプターに彼女の仕事ぶりをオーバーラップさせようとして、そしてそこに見たものは彼女に聞いていたのと同じ情景であり、同じ男女の役割だった。何十年も昔と同じであることが他の社会の変容ぶりとの差の大きさに戸惑いもあった。

映画に縁のない私は、近くに住む坂根田鶴子さんが母の女学校時代の上級生であり、日本で初の女性監督であることぐらいの知識をもって“ききがき”をさせてほしいとお願いを試みた。とかく女は家の中でも、仕事の面ではなおさらのこと、性差の中で生きて来た時代であり、そのことを同性として、その人の口から聞いておきたいとの思いを持っていたのでそのことを彼女に話してみた。

さあ、お話できますかね、話すのは下手ですからとおっしゃる坂根さんは、仕事をする上で帽子やズボンが必要だったのでと刈り上げにベレーやハンチングにズボン姿で撮影所にも外出にも通していられた。そのスタイルは古い日本人の映画人への偏見をそのまま坂根さんに代表させて近所から物珍らしく見られていた。そうした空気の中でも自分の姿勢を崩すことはなく悠々と歩いていられて「私の建てた家を見てもういたかったのに果たせませんでした」という坂根さんに私は話を聞かせてほ

しかったのである。

私は今までこのようなことは他人に話したことはないのですよと口を切った彼女にまず、この世界にどうしてお入りになられたのか、を伺う。

「私は本が好きでした。文学少女というところでしょう。うか。それに父は繊維工業の特許を二百近くもつ発明家でしたから家にいることが多く、母も芝居や映画に寄席が好きで小さいころからよく両親に連れていってもらいました」と自己紹介されるその口調は、一こと一こと言葉を選びながら、どの場面にも決して高ぶらず常に同じスタンスを保ち、自分を客観視しながら話を展開させていかれるそのさまは聞く者に、耳で読む文学書のような風格をもった内容で伝ってきた。

京都府立第一女学校（府一）当時は運動場の花形として下級生の尊敬を集め、制服が着物の時代に、ようやく洋服着用が許されると、富岡鉄斎を祖父にもつ親友と二人で早速洋服を逃えて通学するなどの積極性も兼ね備えた女性徒であった。

これからの女は、一人だちもできるように技術は身につけておく方が良いとの新しい考え方をする男性を父親に持っていた彼女は、父親の紹介で好きな映画の世界へ入るきっかけを持ったことになる。撮影所長は「裕福な普通のお嬢さんのつとまるところではない、まあ長続き

はしないだろう。気の済むまで見学でも来てはどうか」と軽い気持ちで引き受けたのだろうと彼女は話す。

そのころの娘と同じように髪は束髪、銘仙の対になった着物におたいこ帯、足元は下駄の京娘は、毎日飽きることなくお弁当持参で通い続け、ようやくお嬢さんの気紛れでないことがわかってもらって一ヶ月の過ぎたころ、脚本書きが始まるから手伝ってくれないか、と声をかけられ、この一声から四十年に及ぶ坂根さんの映画人生はスタートすることになったのである。

脚本書きを手伝いに行く先が溝口健二監督の自宅、筆記する脚本は「唐人お吉」、彼女はこれ以後十年の間溝口作品に関って経験を重ね、その魅力にとりつかれていくことになる。半年後に監督助手になって三十円の手当を初めて手にし、それまでの和服姿から洋服へとその給料で賄っていく。

映画界の大変革となったサイレントからトーキーへと変っていったのもこの時期で、公私ともに青春期真只中の映画人としての充実感を味う好運児でもあった。三十二才には溝口監督の奨めもあり日本初とその頭につく女性監督となる。しかしこの華やかなことは他の人のつけるもので、彼女にとって自分の思うような作品とは別の内容で、家と学校と映画しかしない人間にはまだるっこいものであり不評であったと言う。



いつの日か自分の作った台本でと夢みていた時代は、中国大陸へ広げていった戦域拡大で戦時一色へと変って、どの監督も思うような作品は作れなくなっていく、男性であれば兵隊に、と彼女のまわりからも鳥のとび立っていくようにスタッフがいなくなっていく。彼女は大宅壮一の制作部長をしていた理研科学映画へ監督として独立して加わり、文化映画に力を注ぐようになる。

南太平洋にまで広がる戦場にますます男たちは召集されていき、内地にじっとしていられない思いに馳りたてられ、すでに満州（中国東北部）にいる大宅壮一の口ききで満映（満鉄映画製作所）へ行くことに決めていった。生来、物にこだわらない彼女は中国人スタッフらと、大陸の中でのびのびと、撮影に出かけ、時には馬車に、

牛車にゆられて文字通り確かな歩みを中国大陸にのこすことになっていく。ここにも男たちに召集の赤紙が届き、メガホンやカメラを持つ手を銃に変えて撮影所から姿を消していく、彼らは異口同音に坂根さんは女でいいのと羨ましがっていたと聞かされる。女らしくもないのにと苦笑しながら。

外地での敗戦、多くの日本人の悲惨な体験は坂根さんにおいても同じであった、が彼女は独身、しかも映画監督であり、女性であったことが彼女の生き方の姿勢のスマートさとうまく噛み合い、敗戦一ヶ月になると、中ソ友好国民大会の模様を映画にとりたいから手伝ってほしいと名指しで呼ばれ、彼女は彼女の映画人生最後の映画作りをソ連人の依頼で作ることになったのである。

日本に帰ってからは労働組合ができ役割もきちんと分かれ資格のない者は監督をできなくなっていたらしく、彼女は最初がそうであったようにスクリプターで好きな映画人生のフィナーレを飾ることになり、映画界の不況に、定年くり下げの口惜しい思いをしながらそれでもアルバイトとして、その後数年撮影所の門をくぐっている。映画の歴史は坂根さんの端生な生き方をとりこんで次の時代へと動いている。

撮影所内で見かけた地味な仕事のスクリプターの女性たちも坂根さんと同じように映画作りを楽しんでいることだろう。

△ブックレビュー▽

鞍馬天狗のおじさんは

聞書アラカン 一代

竹中 芳著
ちくま文庫



野口 良平

スクリーンに登場するアラカンを知らなくたって、チャンバラ時代劇のことにうとくたって、それなりに読むがわをひきこんでしまう本。

ゆたかで、生き生きとした記憶に支えられた嵐寛寿郎の語りの魅力は

疑いようもないし、丹念に調べあげた資料群をバックにその語りをひきだしてみせた聞き手(著者)の腕だっ
て見事なもの。

白馬にまたがって宙をゆく鞍馬天狗の英姿は、八歳の竹中芳少年の前にあらわれて、その魂を高みにさらってしまった。みずからを、天狗を心待ちにする杉作になぞらえた少年は、のちのちまでも「嵐寛寿郎のほかに神はなかった」と語りつづけることになる。

いっぽうそのアラカン自身は、自分の演じる役柄をどんなふうに着とめていたのか。それをうかがわせるエピソードがあちらこちらにちりばめられている。

鞍馬天狗がつけている黒い覆面のかたちをデザインしたのが、当のアラカンだったなんていう話は、この本ではじめて知った。歌舞伎などで伝統的に用いられていた宗十郎頭巾では、どうにもカッコがつかないというこころしい。アラカンにうかが

京都TOMORROWバックナンバーのご案内

- VOL.2
- 第1号 特集：地域考・京に棲む
 - 第2号 特集：京の樹木に会う
 - 第3号 特集：追跡・京都の町内会
 - 第4号 特集：これも京都「深夜」を探る
 - 第5号 特集：老人ケアのゆくえ
——死ぬまで京都でくらしたい
 - 第6号 検証・バブル現象を京都に見る
——バブルなんてくそくらえ!
 - 第7号 特集：ズームアップ戦時期の京都
 - 第8号 特集：京の川・最新事情
 - 第9号 特集：京のみち・路・道・通

いをたてられた曾根純三監督は、カッドウシャシンや、型はわいらがつくったらええのんや、と応じる。新しい形をつくりだす若々しい意気込みが映画づくりの現場にはみなぎっていたことだろう。

アラカンは、大仏次郎の原作のイメージと離れて、自分の鞍馬天狗をこしらえてしまう。内容なんて二の

次の次、チャンバラがすべての鞍馬天狗である。殺陣の形も自分自身で工夫をこらす。クローズ・アップや二人きりの対決シーンなんかでは、真剣をつかうのがつねだった。「ほんまに斬り殺すつもりで刀つかわな、タテでけしまへん」「ホンミつかわな凄みがでない、危険だがそこが修煉ダ」。

たかが娯楽じゃないか、というようにないかたをされたって、ビクともしない。スクリーンのなかでも、実生活においても、そんな言いかたのうしろにあるありとあらゆるものに對してさからいつづけた。

「芸術関係おへん、人をたのしませたらそれでええ。河原乞食けっこうやないか」

アラカン得意の決めゼリフである。

もともとアラカンは、歌舞伎一門の家系の出であった。着物のえりの製造販売業者で丁稚奉公をつとめたのち、十八で初舞台を踏む。だが、歌舞伎役者としては、このデビュー

はなんとも遅すぎた。それで、幼年時代からの憧れだった活動写真の世界に転じる決意をする。板から泥へおりるとはどういう見やと役者の叔父が横面を張る。そのころの映画俳優は、河原乞食とよばれた歌舞伎役者のさらに「一つ下」だった。その後のアラカン、あるいは初期の日本映画の活力の源をうかがわせるところである。

チャンバラ時代劇の世界は、基本的な約束事さえふまえていれば、どんな立場からの意味づけもゆるされる世界である。鞍馬天狗は、一応は勤王の志士ということになってはいたが、勤王とか佐幕というような、現実の歴史でまかりとおっている区別とはべつの世界で生きていた。勝つか負けるかはわからないけれど、運を天にまかせて、全力でプレイする姿勢こそよしとされる世界である。そういう世界にいまふれてみようと思う人は、時代劇映画よりも、むしろJリーグをみるだろう。

アラカンが一代かけてとりくんだ仕事は、近代の日本人がチャンバラ映画に託して同時代史の文脈と照合させてみると、夢の大きさにについて考える手がかりになる。その仕事には、映画人という活動のワクをおのずからはみだしてしまふものがあると著者は考えていたようだ。なるほど、世代から世代への夢の受け渡しに立ち会うのに、シロウトもクロウトもあるものか。

EVERY DAY LIVE! LIVE! LIVE!

PICK UP LIVE

2/6 マリーナ・ショー

3/5 渡辺香津美 "SOLO & DUO"

4/2 日野元彦グループ

ライブタイム 19:30~22:30
パーティタイム 22:30~翌4:30

◎詳しくは情報誌をご覧ください

RAG

LIVE SPOT

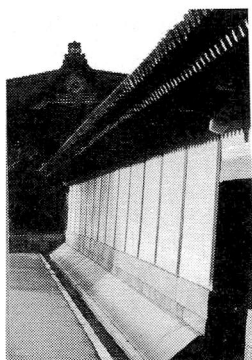
KYOTO JAPAN
PHON 075-241-0446

ライブスポット・ラグ

〒604 京都市中京区木屋町通三条上ル京都エンバイル5F TEL: 075-241-0446

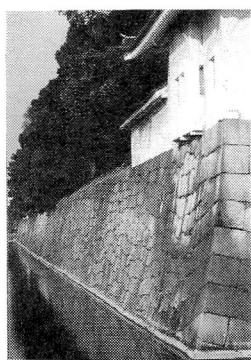
株式会社ラグ・インターナショナルミュージック

チケットお問い合わせ TEL: 075-712-5838 FAX: 075-702-1332



西本願寺

時代劇映画の ロケ地巡り



二条城

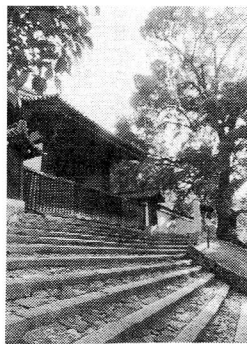
京都に撮影所が残ったのは、時代劇のロケ地として便利だという理由だけだと言う意見がある。この意見には賛成しかねるが、京都にロケ地が恵まれていることは確か。しかるべき場所を通りかかると、映画の撮影にぶつかることが多い。

映画好きな人は、場面を見ると、どこでロケをしたのかすぐに分かるらしい。それほど、同じ場所が、何回もロケ地として利用されている訳で、この京都でも宅地化が進み、電信柱やビルの関係で、時代劇のロケ地として選択できる範囲は次第に厳しくなっていると聞く。

さて、監督になったつもりで市内をロケハンして見よう。

まず京都御所の西南角の白壁のイメージは、平安時代の雰囲気には絶好のロケ地である。二条城の石垣は、忍者物と武家の登城場面に良く使われる。

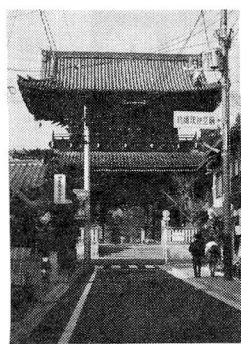
西本願寺の竜谷大学に面した南側部分。ここの長い塀は、武家屋敷の



青蓮院



糺の森



釈迦堂

雰囲気がある。大名屋敷の門としては、仁和寺の山門を入ってすぐ左手にある小柄な玄関門、青蓮院の樟の樹の脇にある黒い門が絶好地。

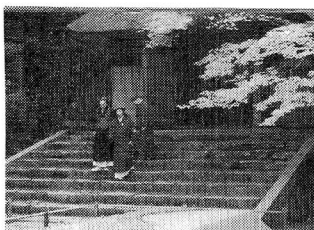
「新選組壬生屯所の正門」のイメージにぴったりなのは、京都御所の南西角にある環境庁京都御苑管理事務所の正門。

三条の六角堂の門も良く使われる。伊藤大輔監督の「弁天小僧」にも現れた。

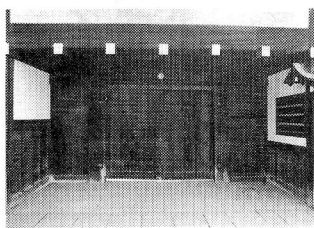
今宮神社の前の茶店付近は、その一角を切り取ると、まるで江戸時代の雰囲気である。ここはチャンバラ時代劇に良く現れ、「眠狂四郎」に



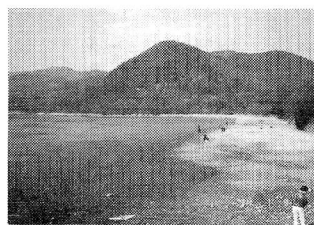
今宮神社



法然院



京都御苑管理事務所



広沢池



大沢池

も登場する。

東福寺もロケ地として多用されているところである。東映の「大殺陣」、大映の「忍びの者」、溝口監督の「新平家物語」、竹智鉄二監督の「源氏物語」などの撮影に使われている。法然院のワラ葺き屋根をもった門は、時代劇にも現代劇にもよく登場する。

下鴨神社の糺の森、相国寺境内もチャンバラ場面に良く使われる。嵯峨の釈迦堂は浅草観音に化け、大覚寺わきの大沢池は上野不忍池に化ける。市川崑監督の「炎上」はこの池岸に金閣寺のセットを建てた。

その近くの広沢池もいろいろに使われるところだ。

近代化の波で、ロケ地は京都の郊外に広がりがつつある。大原野の竹藪も絶好のロケ地であるが、ここさえも次第に宅地化が進行している。座頭市シリーズで使った亀岡の大堰川河原はまだ健在で、荒涼とした雰囲気が残っている。

しかし、京都にロケ地がなくなることに映画人は黙っているのだろうか。昭和八年と言う時代に時代劇ロケ地保存会なるものが設立されたことを思い起こして、映画人の奮起を促したい。

(折田泰宏)

喫茶店「フランソワ」を訪れた

映画人の思い



▼立野留志子さん(74歳)に聞く▼

大映の監督さんでした吉村公三郎さんとは、私のところは古くからのおつきあいで、兄弟のようにしています。京都で仕事をなさる時は、毎日みえていました。その頃、撮っていたのは「偽られる盛装」とか「夜の河」とかで、出演の京マチ子さんや山本富士子さんなどをお連れになってみえられることもありましたね。

終戦後のことですけれど、お店で茶色のサイフを落されて、いろいろ捜してもみつからず……。ちょうど椅子と椅子の間に挟ま^{はさ}まっていて、後から出て来ました。その時分で、四万円ほど入っていて、「まあ、えらいこと！」と驚きました。

今井正監督さんは、一人でじっといつも煙草を喫っていらっしやって、ぼさっとしてはりましたけれど、なかなか人間的に魅力のある人でした。

亀岡で「橋のない川」のロケーションがあった時、被

差別部落の人というもめて、撮影ができない位になりはってね、「どうしたらいいんでしょう？」とうちとこに相談に来りました。差別問題で被差別部落の人が何や怒らしたみたいですよ。部落解放同盟の会長さんの朝田善之助さんをうちの主人が知っていて、その人を紹介してあげて、依田義賢(シナリオライター)さんと今井正さんに会わせ、シナリオを少し直して、ようやくO・Kになり撮影が再開されました。依田義賢^{よだぎけん}さんは溝口健二さんについてはって、仕込まれた人です。

うちの店のコーヒーは宇野重吉さんの推薦のコーヒーですよ。あの方はいつでも、私のところへ見えますと、レモンティでした。「なんでです？」って聞いたら、「コーヒーは、僕、苦いのは嫌いなんだよ」と。私のところで五種類ほどいろいろブレンドを作りましてね。その中のひとつです。クリームもセミウィンナー風にしましてね、そうしますと、ソフトな感じでね、「ああ、これやったら僕でも飲める」と重吉さんがおっしゃって。それで四十年、ずっとやっています。皆さん、おいしいって言って下さって、わりあい好評です。あの方も、一時、悩んでいらっしやったことがあってね、そんな時、よく見えていました、私もよくけんかしましたわ。(笑)「民芸をもっと応援せえ」と言わりますね。私とこは主人が文化活動として、河原崎長十郎さんが座長でいらした前進座を応援していましたからね。

ついに「民芸も応援してあげますわなあ」と答えました。(笑)

宇野さんは言いたいこと言いの活動家でしたが、新藤兼人監督をよくほめていました。あのお二人は仲が良かったですよ。

新藤さんは無口な方で、うちへ見えると静かに本を読んでいらっしました。うちの店が現夫人の乙羽信子さんとのデートの場所でした。乙羽さんが見えているとよくお客さんが「サインお願いします」と。乙羽さんは笑くぼの素敵な、なかなかかわいい人でしたよ。

吉村公三郎さんが監督で新藤兼人さんが補助の形で、島崎藤村の「夜明け前」を撮った時、うちの息子が「莊太」の役を頼まれまして、藤村の生家のある信州の馬籠まで行って来ました。息子はちょうど小学校一年に入った頃ですから、やんちゃ盛りですから、じっとしてはらへんしね、大変でした。それにお昼からの撮影でも、朝の八時から行かなければなりませんやろう。監督の吉村先生に「監督!」とか「おっちゃん!」とか言うたりね、ハラハラしました。夏休みでしたが冬のかすりの着物を着せられ、ドーランも暑さですぐ落ちてしまっってね。莊太役の息子は「お父さん、お帰り」とか「いっていらっしやい」とかの短い台詞(せりふ)がありましたが、撮影のことよりザリガニ獲りに夢中になっていました。

(聞き手 塚崎美和子)

ひとくち映画ニュース

★「目玉の松ちゃん」像

出町柳のあの三角州に「目玉の松ちゃん」像が建っています。風の便りでは最近まで毎日清掃する人がおられたそうですが……。

★京都文化博物館

□映像ホール(3階)

京都は、日本映画発祥の地であり、日本のハリウッドと呼ばれていました。このため、京都府では昭和46(1971)年から京都府フィルムライブラリー事業として映像資料の収集・保存を行ってきました。博物館では、映像文化の研究・振興を目的として活動しています。

日本の映画監督・映画史を理解できるような作品や新しい映像表現の特集を組み、午後6時15分より映画を上映しています。また、ハイビジョンシアターとしてニューメディアのハイビジョン映像を午後1時30分より上映しています。

□映像ギャラリー(3階)

上映映画の特集テーマ等にあわせて、映画機材、スチール写真、ポスター等を展示しています。

★嵐山にもうすぐ「美空ひばり館」

'94年1月現在、「近くオープン」とのこと。渡月橋北50m。お問い合わせ先は

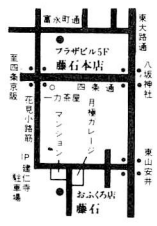
TEL 075-864-5000

京都市右京区嵯峨天竜寺芒の馬場町3-25

味と武蔵

はま

石



本店 ☎(075)551-3443
おふくろ店 ☎(075)561-4782

ファンより寄稿

東映時代劇映画の
復活を

岡田 栄

久しぶりに東映京都撮影所に行つた。昭和五十年代は知人・友人を訪ねてよく行ったのですが昭和六十年代に入ってからあまり行きませんでした。それ迄はスタジオを観ても細かい所迄気が付かなかったのが今回スタジオの入口をよく観てみますと建てた年と施主「代表取締役大川博」の名前と手形があるのを発見しました。

第一スタジオ始め主力スタジオは昭和三十年に建てられています、俳優会館は昭和三十一年と記されてい

ました。東映史「クロニクル東映Ⅱ」をみますと昭和二二年以来、(當時は東横映画)大映から賃借していた京都撮影所の土地・建物を昭和三十年三月、約六、七〇〇万円で譲り受けたとあります。又、その年、隣接地の購入分と借地分を合わせて総敷地面積は四ヘクタールに達したとのこと。昭和二十六年東映設立以来、資金に苦しんでいたのがわずか五年で大躍進し、昭和三十一年には年間配収で邦画会社のトップに立ったのです。

私は当時、小学校低学年でしたが時代劇映画が大好きでおつかいは一人で行けなくても映画は一人で観に行けると言う変な子供でした。スターの好みも、東千代之介から中村錦之助・大友柳太朗・大川橋蔵へと移って行き昭和四一年、高校卒業と共に事実上、東映時代劇はスクリーンから姿を消しました。少年時代から青春の時代を東映時代劇で過ごした身としては、ヤクザ映画はドギツ

サが目立ち、昭和四十四年迄は大映の「眠狂四郎」「座頭市」で餓をいやし、その後は洋画の本数が増えてゆきました。

しかし、昭和五十年に入ると東映太秦映画村が開村しテレビ・プロの方達とも親しくなり子供の頃から憧れていた東映京都撮影所へ出入りする様になりました。スタッフの人達は親しみやすくすぐ仲良くなりました。その中には、つかこうへいの「蒲田行進曲」に出てくる人物にそっくりだなあと思う気の良い方達がおられました(第一スタジオでこの映画のハイライトの大きな階段のセツトが組んであったのには驚きました。)そしてあろうことか現、京都撮影所長の佐藤雅夫さんをお願いして弘法大師が亡くなってから一一五〇年を記念しての映画「空海」とタイアップしまして当時私が勤めておりました日本旅行で中国旅行を企画し、北大路欣也さんに直筆で旅行参加者全員にサイン入り色紙を書いて頂きま

した。

映画村も開村当初はオープンセットの雰囲気を残していましたが今回行って驚いたのはテレビプロの後地のセットはまだしも他は和洋入り乱れてあれでは東映お得意の時代劇が撮れないのではないかと。又、映画村として期待して来るお客様を失望させはしないかと感じました。映画村の経営からするとリピーターのお客が来ないと経営は成り立たないのかも知れませんが私は不満です。オープンセットでどんな角度から撮っても成り立つ様、組み替えられないか。「その工夫さえすれば映画村のお客様にも喜んでもらえるテレビ映画もオープンセットを利用しやすくなる環境が必要ではないでしょうか。」そこから東映時代劇映画を復活させてほしい。だいたい十年毎に好みが変わるのですから、東映から時代劇映画が無くなってから約三十年、早く復活の狼煙を上げてほしいものです。

「平安建都二二〇〇年映画をつくる会」

“浮島丸事件”を

人間ドラマに!!

京都市が建都二二〇〇年を記念して行う数々のイベント、そのアピールを聞いて、「私たち市民の手で自ら何かをしよう! たくさんの人が交流し参加できる映画を作ろう!」と、九一年発足して二年三ヶ月……。

賛同の会員は七百名、重ねたミーティングは百回。ほかに賀茂川での野外無料上映会や川谷拓三のトークショー、シナリオ・アイディアを全国から公募したり清水寺でのマルセ太郎のロードショーのほか、ゲストを招いたシンポジウム「私の京都論・私の映画論」の開催とさかんな日常活動のもと、映画のテーマは「浮島丸事件」と決まり、昨夏には「四八年目の浮島丸ツアー」も行なった。

一九四五年八月二二日、強制連行された朝鮮人（日本側の記録では朝

鮮人三七二五人、海軍乗組員二五五人）を乗せた輸送船「浮島丸」は、一路釜山に向かうはずだったが、途中舞鶴港へ寄ることになり、湾内で謎の爆発をおこして沈没した。当時報道はされず、いまだに乗船名簿も明らかでなく、沈没原因も不明。一昨年、生存者と遺族の代表が京都市裁に訴訟をおこした。

「事件自体は重たいが、青春ものの人間ドラマにしたい。九五年は戦後五〇年、アジアと日本の関係を問い直すこの事件を多くの人々に知ってもらい、国をこえた市民映画にしたい」と事務局の小林完さん。

青森には「浮島丸・下北の会」、舞鶴にも「映画「浮島丸」製作協力舞鶴の会」ができ、いよいよ今年は製作の年。「これが全国につながる市民活動に、九五年に完成すれば広くアジアにも持ち歩いて上映運動を」と、その射程は長くて根強い。お問い合わせは二二・〇八九〇の事務局へ（高橋幸子）

「京一会館」が のこしたもの



わだつみ あきら

▶ 弘原海 晃さんに聞く ◀

知る人ぞ知る「京一会館」。1960年から88年まで、28年間の歴史をのこして幕を閉じた。京一会館の生んだ出会いの姿を変えて、京都のアチコチにリレーされ、今も生きつづけているだろう。学生時代から20数年を京一会館で過ごし、後半の13年間は支配人を引き継いだ弘原海晃さん(47歳・山科在住)に話を伺った。能や歌舞伎の歴史を思えば映画はたかが百年。“不振”も過渡期、まだまだこれから。話を聞いて、そんな希望がぼんやり見えた。

● 時代とともに

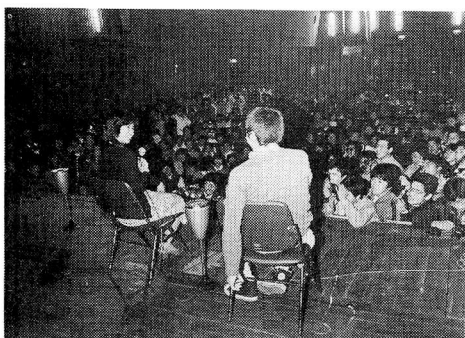
あの頃はしだいに地域が開けようとして、何をしても面白い時代でした。一乗寺あたりはもともと農家のほかに友禅染めの工場もかなりあり、加えて学生の住む街にもなりつつあった。そこへ地元の公設市場が買物客のアトラクションとして、二階に京一会館というスペースを作ったのが始まりです。職人に学生、そして隣接の高野にはカネボー跡に大きい団地ができて勤め人も集まってきました。そんな土壌に支えられた場末の映画館は、時代とともに活気を帯びてひとりあるきしていったんです。ぼくも始めはお客でした。客がやがて従業員になったわけです。若い頃、京大の吉田寮に九年いまして、学生のいわばウラオモテをやっていたんですが、最初は昆虫に魅かれていました。そこから人間の心理学に興味をもち、それが映画へ反応する方向につながったんですね。

● あんなんアリ、こんなんアリ

一日に二百人から三百人ぐらいい入ってたかな。冗談で「買物のレシートを何円分ご持参の方はタダ」という遊びもありましたが、京一会館ファンの会もありました。断然、男の観客の方が多かったですよ。自分たちの撮った映画を上映したい、映写機だけ使わせてほしいという申し出もあって夜中にやったりして……主に学生がにない手でした。

映画好きがロビーや事務所で自然発生的に話しあう井戸端会議がひんばんで「次は何を上映しよう」とか、見る人見せる人がいっしょになって京一会館を企画運営していた感じでした。市場の人寄せみたいなあまり場です。だから、儲けを度外視して互いに好きな意見を言うというわけです。

年間三百本ぐらいい映してたかな。復興後も十三年間、チラシをNo.一四七まで出しましたが、よく最初の目的はどこかへ行って結果のためにや



薬師丸ひろ子がやってきた。
京都在住の高林陽一をはじめ、大森一樹や
大島渚や黒木和雄など映画監督もたくさん
話に來た。

るってことあるでしょ。チラシを作るために上映するとか（笑）、名作駄作を問わず上映の組み合わせも愉しみました。さまざまな監督のデビュー作を集めたり、未発表ものや自主映画、宮本武蔵大会、そしてやぐざとボルノ、百恵と淳子を並べたり。ぼくはあんなんアリ、こんなんアリが好きなんです。こだわりをなるべくはずすということにこだわる方。そうすると何かが残る気がしまして。

● 時代に見合ったものがある

外からもたくさん人がやってきました。こっそり出入りするプロもおられました。京都というのは不思議な街、ヨソとはちょっと別格って面がありますね。「京都」がそのままブランドになるような、ヨソならマインナスになるイメージをプラスに変えて誇ってるようなところがあるのでしょ。今はさりげないタコ焼き屋のおっちゃんや昔はエライ人だったとか、そんな人が涼しく住んでいたりして偶然知り合う。京一会館の背景にも「京都」があったと思いますね。

市場から生まれた映画館。閉館も直接は市場が移転したからですが、やはりぼくには余韻がありまして、お誘いのあった新潟や伊賀上野の映画館へ二、三年出稼ぎに行きました。ウーン、ぼくはどちらか言うときつい映画の方が好き。それに邦画の方がいいかな、字幕を読まなくていい

から（笑）。時代劇といえど岡本喜八の「ジャズ大名」なんかメチャクチャ面白い！ 時代劇ミュージカルね。唯、ここがウソだとかあの場面が不自然とか、時代劇は批評する力が弱いつてことがありますよね。

映画人口は今も減ってませんよ、逆に増えてると思う。だってビデオの元は映画ですからね。今は唯、たやすく見られる、たやすく作れる。

密度が薄まったというか……昔は全部見られたけど今は多過ぎて全ては見られない。見る対象が増えて拡散したということじゃないでしょうか。

昔の方がよかったと言っても、その昔を知らない人とは回路が切れるだけ。共有できないイメージを語っても一方通行で、ぼくはどの時代でも見たがりや出たがりはいれると思うんです。作りがりもね。

できるだけ安く、多く見るのが一番。そしてその時代に見合ったものがいっただって残ってゆくんだと思っています。（聞き手・高橋幸子）

インタビュー

映画は

世界と出会う

場所



▼朝日シネマ支配人

神谷雅子さん(37歳)に聞く▲

——朝日シネマができたきっかけは？

●企画・製作・配給をやっています「シネマ・ワーク」と配給会社日本ヘラルド映画、朝日新聞社の三者の企画で「銀河鉄道の夜」というアニメーションがありました。そのプロジェクトの経過の中で生まれました。朝日会館が新しい建物になってから文化的活動を活性化したいという朝日新聞社の想いと、ちょうど私たちの京都でも東京の岩波ホールなどで上映されているような名画を見たという願いが重なり、運営は「シ

ネマ・ワーク」がやるということ、一九八八年七月にオープンしました。

——朝日シネマをつくられた時の構想は？

●私たち自身が観客だったらどんな映画館がいいかをまず考えました。

①入れ替え制 ②場内飲食禁止 ③会員募集して、映画館側のメッセージを伝えるシステムをつくる、の三点です。

——朝日シネマからのメッセージとは？

●まず映画をキチンと見てほしいということと年間何本かは社会性をもった映画を上映することで、今、世界の人が何を考えているのか、何が問題になっているのかを映画というメディアを通して伝えたいと思います。評論家の矢島翠さんが「映画館は世界と出会う場所だ」とおっしゃられています、改めてピッタリな言葉だと思います。

——入れ替え制は京都では初めてですか。

●うちだけだと思います。関西でもたぶんここだけだと思います。入れ替え制に馴染んでいないので、初めはトラブルがありましたね。今ではアンケートを入れてみましたが90%前後、入れ替え制にも飲食禁止にも賛同されていました。「続けて見たい」という要望もありましたので、混雑していなければ、チケットの半券を見せて再入場も認めています。

——会員制というのは朝日シネマ倶楽部のことですね。

●現在会員は一五〇〇人位です。会員には招待券二枚進呈、入場料の割引(一般一七〇〇円を一二〇〇円)、毎週水曜日は会員デーということで一〇〇〇円にしています。

一九八八年にオープンした時はいろんな所で紹介され二〇〇〇人の会員が集ったのですが、二年目は半分以下になって、ガクッと来しました。

四年目ごろから徐々に回復して来ましたが……。

——いろいろなメッセージを発信す

る朝日シネマの企画として成功したなあとと思われる上映作は？

●反アパルトヘイト映画「サラフィナの声」が人口比で言って日本で一番よく見てもらえた映画です。他に「四万十川」「阿賀に生きる」「月光の夏」「病院で死ぬということ」など人口比で言ってもよく見てもらえたと思います。

——ヒットしたのは？

●それはやはり「恋人たちの予感」「モモ」「ニューシネマパラダイス」「八月の鯨」「クライングゲーム」など全国的に入って、京都でも入ったという作品ですね。

——どの作品を選ぶか、大変ですね。どのように決めるのですか？

●原則としてまず映画を見て、これはやりたいなあと思った映画をやります。試写会、映画祭などを含め、一ヶ月に十本は見えていますね。

うちでは、メジャーな配給会社の映画をやることはありえないですから、個人的なつながりで、紹介いた

だいたり、おつきあいのある配給会社の情報とか、東京へ出かけて得た情報とかいろいろです。一九九三年は韓国で三本、見て来ました。今年はアジアの映画祭へ行ってアジアではどんな映画が創られているか見て来ます。

——スタッフは何人ですか？

●専属社員は私を含め二人です。二人で企画から営業、宣伝、経理、総務すべてをやっています。あとは映画の担当が非常勤で二名とアルバイトが約二〇名です。

——映画のお仕事をされていて特に訴えたいことは？

●昨年、小津安二郎の現存するフィルム三四本中の三二本を上映しました。映画というのは歴史の証言ですから、小津の昭和初期の作品を見たいですと、その時代の日本が映っているわけです。それって非常に貴重なことだと思うのですが、そういうものを日本ではほとんど消耗品にしています。日本は文化としての映画

の位置づけがとても低いですね、保存して資料を整理して、映画を研究している人や映画を志そうとしている人に利用してもらうシステムをほとんどもっていないのです。先進国の中ではとても遅れています。

——最後にこれからの朝日シネマの企画を。

●かつて六〇年代の日本映画の雰囲気、今のアジアの人たちがもっていて、パワフルと言いますか、映画に勢いがあります。中国、韓国、タイ、みんなそうです。イラン映画もおもしろかったですよ。

中国映画は今や、世界のメジャーですね。一九九三年カンヌ国際映画祭のグランプリを取ったのは中国映画でした。今年の四月に朝日シネマでも上映しようと準備しています。

陳凱歌（チェン・カイコー）という監督の「さらばわが愛」という映画です。

——本日はどうもありがとうございました。（聞き手・塚崎美和子）



みなみ会館（1階はパチンコ店）

ずばり映画ファンの

パラダイス

みなみ会館

東寺の南東、九条大宮の角から東へ歩いてすぐ、パチンコ屋「ラスベガス」の二階にみなみ会館がある。

この映画館がボルノ映画館から名画座に転身して以来、私はこの映画館に平均すればたぶん月に一本ぐらいの割合でお世話になってきた。

この映画館の上映企画はRCSという自主上映グループ（五〇頁）が作っているそうだが、送られてくる上映予定表をみると、プログラムはいつも旧作・新作入り乱れたごった煮状態である。これまでにここでみた映画を思い出してみても、それが映画であったこと以上にどんな共通項があっただろう。市川雷蔵のチャンバラ映画特集、ジム・ジャームッシュの四本立てオールナイト、毎年恒例のチェコ・スロバキア映画祭、「POWER OF ASIA」と銘打って上映されてきた数々の日本・中国・台湾などからの新作・近作映画たち……。東京や大阪にくらべれば、京都でみることのできる映画の幅は極端に

せまい。封切り館にかかる映画の数や種類は、ほんとうにたかがしれている。そのうえ東京や大阪で不振だった映画は、京都まで回ってこないことだって少なからずあるのだ。手近にみることのできるものだけをみて、こんなもんか、とあきらめていると損をする。ビデオがこれだけ普及した今だけど、ビデオ化されていない映画のなかにも、とてつもなくおもしろい映画がまだまだ残されている。ただその可能性の広がり、可能性のままで放置されてしまっているだけなのだ。

おもしろそうな映画なら何でもみてやろう、好きな映画だからみんなにもみてほしい。みなみ会館の上映プログラムの背後には、目先の利益だけを考えた収縮してしまいかねないような気概が構えていて、ごった煮プログラムのなかでも企画者独自の批評眼となっていたらいている。その目利きの能力こそが、放置されている映画の可能性を少しづつ具体

化してゆく力になってくれるのではないか。

もちろん、その目利きの能力をはかりにかける最も重大な尺度は商業的な成功なんだろうが、好きな映画をみたい、という欲求に支えられないところでは、どんな批評能力も涸れてしまうにちがいない。興味ばかりが先行したごく一部の映画マニア

のための内輪うけにとられず、逆に利益に興味が届いたような無芸な商業映画館にもならず、ここまで活動を持続させてきた蔭には、好奇心と商才とのいい加減のブレンドがあるのだろう。

映画雑誌の批評を読んだり映画の歴史を勉強したり、綿密な学習の上で映画をみるのもおもしろいけれど、

思いがけない邂逅のような感動の味もわすれがたい。こまめに情報を集めるのはおっくうだけど、いい映画にはいつでも出会いたい。そんなずぼらな映画ファンにとって、こんな映画館があるのは、うれしい。

問い合わせ／〇七五―六六一―三九九三

(那須耕介)

学生、学生による、学生のための映画

京都シネック

荒神口の京大東南アジア研究所わきにある、クラブボックスの寄りあい所帯の二階へとぎしぎし階段をのぼって、京大シネマ研究会のクラブボックスを訪ねた。大きなビデオデッキやハミリ映写機、巻き取り式のスクリーン、パソコンなんかが雑然と並べられている。京都シネックとは、

この京大シネ研を含む京都の各大学の映画自主制作グループが約十団体で構成している連絡協議会。その活動や現在の学生による映画制作のようなどについて、つい先日までシネックの世話役をしていたというシネ研の高柳さんに話を聞いた。

シネックに所属している映画サー

クルが作る映画は、ほとんど例外なく脚本から監督、出演まで仲間どうしの協力にもとづく自給自足の制作で、基本的にはフィクションのみを扱ってドキュメントなどにはとろくんでいい。その内容は青春映画からコメディ、シリアス・ドラマなど、サークルの趣向に応じて多種多様。

どうしても出演者が同世代の人間にかぎられてしまいがちなので、その制約のなかで内容もきりもりしなけれなければならない。が、ときにはエキストラで親戚や知人に出演をおねがいすることもあろう。ほとんどはハミリフィルムで撮っているが、最近ではビデオを使う人もふえてきた。圧倒的に安価で音のよいビデオにくらべると、三十分たらずの作品に十万円もかかってしまうハミリだが、できあがった映像のふうあいですてられず、ビデオに転向するのにもなかなか抵抗があるようだ。


シネックという組織は、元々大阪・神戸・京都の三都市の大学の映画部が参加して活動していたのだが、最近、自然分裂して独自に活動するようになった。年に二回、各サークル内での「予選」を勝ち抜いたフィルムをもちよって、公開上映会をもよおしてグランプリを争っている。情報誌「ぴあ」が主催している自主制作映画の全国規模のコンテストにも

参加して、時にはグランプリ候補にノミネートされる作品がでることもあるとか。

わがままをいって、シネ研で作った手持ちの作品を何本かみせてもらった。どれもふつうの基準ではかれぱしろくときさい作品なんだろうが、なかにはそのしろくと性を逆手にひねったような妙な味わいで、ひとつの小宇宙を描こうとしているものもあっておもしろかった。現在、京大のシネ研では同時に十数本の撮影が進行中なんだそうだ。

出演者が学生だけ、というのは（独特の面白味もあるのかもしれないが）、やっぱりちょっともったいないような気がする。せっかく上映会は公開でやってるんだし、学生以外のお客さんにもみてもらうために、どんどんそのへんの人をまきぞえにして撮影するような、アイディアと身軽さをそなえた撮影隊がでてくるとおもしろいんだけど。

（那須耕介）



住統の
ぶとぼとる

■吉祥院店
京都市南区吉祥院池ノ内町58
TEL. 075-662-5566

■岩倉店
京都港北線電岩倉駅前通り ビケン岩倉ビル
TEL. 075-722-6667

■その他 大阪空港 1号、2号店
産寧坂店、嵐山、清水三十六峰各店

義
い
ー
だ

ビル・マンション建築 管理

株式会社 **ビケン**

代表取締役 石田 勝久

専務取締役 八木 保治
一級建築士

本社：〒604 京都市中京区千本通御池下ル
(JR二条駅前ビケンビル内)

TEL (075) 841-1223(代)

FAX (075) 821-2317



町のライブラリーとしての

レンタルビデオへ



那須 耕介

—映画への入口はビデオだった—

このところ、レンタルビデオ屋へはいると、棚にぎっしりならんでいるビデオの背をながめながらぼうつとしてしまうことが多い。

この役者（あるいは監督）の作品ならどんなのだってみてやろう、という絶対の好みがあるわけではない。年間何百本を「観破」するぞというところざしをたてるほどの、つわものでもない。ただ、時間があるから、そして最近のテレビがあまりにもおもしろくないから、という理由で、あるいは自分でもよくわけのわからないままに、なんとなくビデオでも借りてこようか、という気になるの

である。

コーヒー一杯分程度ですむのだから、なにしろ安価な暇つぶしではある。子供のころは映画のことを、めったに行く機会のないかなり特別な娯楽とおもっていた。それが、わが家にビデオが運び込まれ、レンタルビデオ屋に入会したとたんに、お手軽な楽しみのひとつになった気がしたのをよくおぼえている。以来、映画館でみた映画の何倍の量をビデオでみたかわからない。私の場合、映画という娯楽への指南役は、レンタルビデオ屋が一手に引き受けてくれたようなものだ。

（映画業界にとっても、いまやビデオ市場での売上げが興業利益に匹敵するほどの重要な収入源になっているんだそうだ。また、ある自主上映組織にインタビューにいったときにも、ビデオがここまで普及したおかげで一時低迷していた映画産業がある程度息を吹き返すことができた、という話を聞いた。映画とビデオを対立するもののように考えるのは、ちよつと単純すぎることなのかもしれない。）

ともかく、手軽な値段でみたい映画を簡単にみることができるようになった。私がよく利用するビデオ屋はおおよそ三万本のビデオソフトを置いているそうだから（ほんまかいな）、その店の会員になるだけで、私は三万本の映画の世界にふれる可能性を手にしたことになる（実際は、そのうちの何割かは映画じゃないんだけど）。

しかしながら、ビデオ屋の棚の間をふらふら歩く私を、徐々にもうろ

うとさせてしまうのも、この三万本という量なのだ。

「豊かな可能性」は、使いこなす能力のない者の前ではいつまでたってもただの「豊かな可能性」のままだろう。かならず特定の作品を心に決めて店にむかう人なら、そんなばかげた思いをすることもないかもしれない。しかし、私のように、漠然とした気分——血沸き肉躍らせ手に汗握りたいとか、のたうち回って笑いころげたいとか、あるいは広々とした異国の風景をながめたいとか、微妙な感情の機微にふれるようなドラマがいいとか、そんな程度の見当——しかもたないでやってきた者にとって、三万本のなかから今日の一本を選び出すのは至難のわざなのだ。そんなとき、たとえ百万本分の別世界への可能性が私に対して開かれていたとしても、じつはそれは「可能性」とはいえないんじゃないか。

町にレンタルビデオショップがば

つぼつできはじめたのは、たぶん十年ほど前のことだろう。そのころなら、みたい映画を選択できるというだけでも、それまでの映画の楽しみ方をがらりと変えてしまうような革新性があつた。しかし、もはや事情は同じではないだろう。「選べる」こと自体には以前のような新鮮さはない。レンタルビデオショップは、町の私設ライブラリーとして日常生活風景のなかに定着してしまった。私がビデオ屋で直面している困難（？）にむりにひきつけるなら、選択の余地が「あるかないか」からそれを「どう活用するか」へと問題は移ってしまっているのだ。

三万本分の映画世界への可能性をどうやって使いこなすか。ビデオ屋にもいろいろ注文はある。はっきりとしたねらいを定めて店に来る人にとっても、私のように漠然とした欲求しかもたない客にとっても、今のビデオ屋は決して使いやすいとはいにくい。どこに何があるのかわか

東映太秦映画村探検記

君は

「電動くのいち」
を見たか?!

原 祥雄

映画村の広場でぼんやりとたたずみ、煙草など取り出して一服つこうとしていると、視界の片隅に怪しい影。やや！なんと空の上を忍びの者がするすると隣の館に渡っているではないか！このハイテクSFX時代にマネキン顔の忍者が電動仕掛けであらわれるとは思っても見なかった。しかもその動きの実に怪しくリアルなことと言ったら！

忍者は渡り綱の中心部で止まり息をひそめてじっとしていたかと思うと、何を思ってたか、今度はするするとそのままバックで出てきた館に戻っ

りにくい、あの陳列のしかたにはもう少し工夫がほしい。そもそもカラスのケースを並べるあのやり方はスペースのむだづかいじゃないのか。もっと検索が簡単にできるようにはないのか。

しかし何といっても、一方で映画をみたいという漠とした欲求があるのにその気分にあふさわしい映画がみいだせず、その一方で私の知らないとてつもなくおもしろい映画がどこかでホコリをかぶっているかもしれない、という事態はじつに歯がゆいことじゃないか。レンタルビデオショップという町のビデオライブラリーの出現によって、映画鑑賞という娯楽も、読書なみの手軽さを獲得しつつある。でも『ローマの休日』や『バック・トゥ・ザ・フューチャー』がみられるというだけで満足できる時期は、そうそう長続きしてはくれない。私が「知っている」映画の数など本来にたかがしているのだから。店の棚を埋めている「その他大勢」の

莫大な量が気になってくるまでには、大して時間はかからないだろう。

たとえば私の場合なら、図書館で借りる本に迷うということが少ないのは、本棚の間をぶらぶら歩きながらでも自分が読みたい一冊を捜し当てるこのようなものを自分が知っているからだとおもう。ビデオ屋の棚の前でぼんやりしていると、ビデオを借りる場合にはそのようなことらしきものが、自分には決定的に欠けているのを感じる。本を選ぶときには、口コミや信頼のおける書評、自分の読書経験からの類推なんか、自分なりのこつを会得し、それにみがきをかける手助けになっている。ビデオ時代の映画娯楽のためには、そんな選択のための知恵を育てておく必要があるんじゃないか。ビデオ屋にいくたび一時間も長居してしまふ私は、だるくなつた足をさすってつくづくそう思ったのだった。

ていった。愉快な発見に思わず同行の取材スタッフにそれを伝えるが、どうにも返ってくるのは「あ、そう」程度の反応。うーん、この歯痒さ。愉快な驚きを共有したいが相手に届かないフラストレーション。これは実際に見てもらうしかない。もう一度、出て来ないかな。出てこい、電動のいち！祈りが通じて、マネキン顔のくのいちが再びするとあらわれた。ほら、ほら！おおっ！周囲に湧き起こる驚きの反応。これですよ、これ。ようやく僕は満足。

さて、テレビで見慣れた侍の町を通り抜けるとイベント広場。なんでも怪獣があらわれるそう。鉄柵の脇にはバスの時刻表のように怪獣のあらわれる時間が書かれてある。ずらりと並んだベンチに腰を下ろす。辺りを見回したりしながらリラックスして怪獣のあらわれるのを待つというのも変な感じだ。しかし、確かにワクワクしているのも事実。さて時間となつて轟音が響き地震が起こつ

自主映画サークル

★RCS★

アール・シー・エス

京都のいくつかの大学の映画サークルのメンバーが、自分たちの卒業をきっかけに約十年前に旗あげしたのが、この組織のはじまり。京一会館をふりだしに、ルネッサンスホールや弥生座、美松劇場。どの会場でも、本編の終了後や空き時間にいそうろうする形で映画を上映してきた。ルネッサンスホールが閉鎖されたあとは、みなみ会館（四四頁）に拠点を移した。現在はここを中心に百万遍のイタリア会館や西部講堂、美松劇場のナイトムービーなどで、月に二、三十本の映画の上映を企画・運営している。古いチャンバラ映画から芸術色の濃い前衛フィルムまで、プログラムの守備範囲は広い。

会員には現在約千人が加入してい

る。年会費七千円で六回分の入場券、特別料金で入場できる会員証がもらえるほか、ほぼ月に一度の割合で上映スケジュール表とチラシ、ニュースレターなどが送られてくる。

自分たちの映画館をもたない自主上映組織だけに、みたい映画のフィルムを求め、使える映画館をさがし、苦勞がしのばれる。でもその足場の不安定さが、かえって映画への好奇心とフットワークの軽さを活かしているようだ。今、大きな後ろだてをもたない自主上映活動が持続力をもつためには、OLの協力と動員とが鍵を握っているという。この点、学生（特に男性の）が主な担い手だったかつての京一会館とくらべると、時代のちがいが映されているようにおもしうい。慢性的な人手不足は、二十人前後のボランティアがおぎなっている。こっちは女子学生が主戦力だとか。

問い合わせ／〇七五―三二五―七二八

た。水車小屋はぐらぐらと揺れ、中
でなにかが燃えだしたようで真っ赤
な光が窓からもれている。うーん、
芸が細かい。そして階段状の岩場か
ら滝のように水が流れだし、勢いよ
く噴煙が上がった。さあ、いよいよ
だ。おおっ！ 出た出た怪獣だ。赤く
光る目玉に大きく裂かれた口から大
きな牙。頭には大きな二本の角。絵
に書いたような邪悪な面構えにしぼ
し見とれる。巨大な顔だけぬっと出
して、怪獣は辺りをへいげいすると
まもなくまた岩場にゆっくりと姿を
消した。やがて滝の水も止まり、水
車小屋も揺れをやめ、そして地響き
はフェイドアウトした。あたりに平
穏が戻ると、ベンチの観客はほーっ
と満足とも物足りなさともつかぬた
め息をついてそれぞれ腰を上げる。
時間どおりに律義な怪獣はプロ根性
に徹した「いかにも」という悪党づ
らであらわれて観客に危害を加える
こともなく去って行った。いやあ、
スゴかったですねえ、などと立ち話

★ベンゲット★

四条大宮から南に二百メートルほど歩くと、郁文中学校のま向かいに鍋料理屋「石狩」がある。そのビルの三階にある五、六十人で満員という小会場で、常時興業をおこなっている。この映画館、「自然堂」という名で六年ほど前に営業を開始するその前は、小さな酒場だったんだそう。

有限会社としての体裁は整えているが、実質上は二十人近くいる学生中心のスタッフの援助によって支えられている。上映プログラムの企画は、京大映画部がサポート。通常は洋画・邦画とりまぜて、月に特集を三組、合計約二十本たらずを上映している。また、日本の若手映画監督による自主制作映画の上映にも力をいれてきた。

近年、これら若手監督たちが十六ミリフィルムから三十五ミリフィル

ムへと転身をとげつつある。かれらのこの「成長」に対応して、これまで十六ミリの映写機しか備えていなかったベンゲットのほうも、そろそろ脱皮の機会をうかがっている。目下スポンサーを募集中だとか。

「おしゃれなマイナー映画もいいけど、その自主上映独特の〈構え〉がかえって上映者・観客双方の視野を狭くしているところがある。もっと映画本来の面白味をもった作品に眼を開いていくような、発見に満ちたプログラムを組んでみたい」と、スタッフは意欲のあるところをみせていた。しかしながら、現在の経営状態はかなり深刻で、十分な宣伝もままならない。早くいいいスポンサーを見つけて、持ち味をじっくり発揮してほしい。自主上映は、新しい情報創造・発信するそのイキのよさこそが命なんだから。

問い合わせ／〇七五―八四一―〇四八七

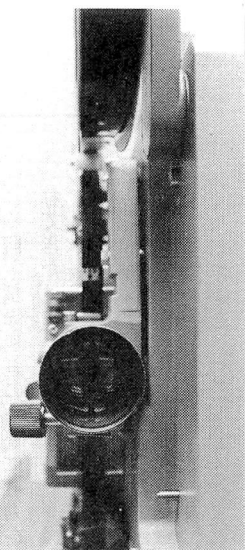
(那須耕介)

していると、岩場の背後に見える遠くの山々、ん？よく見ると絵なのだ。スゴイ！どうみても遠くにかすむ青い山なりそのものだ。これは全然気がつかなかった。そのまたうしろの本物の山や空とすっかり溶け合っている。うーん、すっかりだまされた。波平さんじゃないけど「こりゃ、一本とられた」って感じ。だまされたけど、超愉快。

映画ってこむずかしいことじゃなくて、このオドロカシが神髄なんじゃないかなろうか。感動や説教よりも人をつくりさせること。これは共感的にわかる。楽しいだろうな。なんだかがキの頃の遊びを思い出した。人をオドロカスこと。うん、これが映画づくりのヨロコビと私は見たね。映画村はオドロカシのワンダーランドだ。



問い合わせ先
(075)
864-7716



ドキュメンタリー フィルム ライブラリー

中川ユリ子

ドキュメンタリー・フィルム・ライブラリーとは、和訳すれば「記録映画資料館」。大げさな名前をつけたものだとも思う。

実態とは大違い。間借りである。

いや押入借りである。フィルムやビデオはそこに置けないので、個人の家にある。なかなか収益が上がらず、一六ミリフィルムの購入もままならない。その数やっと八本である。

最初は、お酒の席の勢いで始めた構想だった。一九八六年に有志で集まって行った『人間の街：大阪被差

別部落：』の上映会が成功し、そのあと『日本鉄道員物語』の上映実行委員会ができた。これもまあまあ成功。この二つの上映実行委員会にかかわっていた個性豊かなメンバーが、お酒で舞い上がって話を始め、後日それを聞いて数人が思わず乗ってしまった。上映会をしてその収益でフィルムを買おう。昔の記録映画で、今、誰かの手元で眠っているフィルムがあれば、掘り起こしてそれを情報として会員に流そう。ゆくゆくは資料館みたいになしたいと、夢が膨らんだ。その気持ちをせっかちにも、会の名前にしてしまったのである。

しかし、やってみれば、上映することに第一の意義を見つける、儲らないイベント屋さんみたいなもの。今の事務局の実働メンバーは三人。実は私は会員への通信を郵送するための下準備ぐらいが精いっぱいである。ところが事務局の三人は不思議なぐらい粘り強く頑張る。二ヶ月に一度の割の上映会、毎月のニュース

の発行。黒字はないが、大きな赤字もこの頃は出ない。細々とではあるが、続いている。発足当初、事務局員が五万円ずつ出資した。それを取り戻すまではやめたくないと思っているのかもしれない。

記録映画のおもしろさにはいろいろあるが、社会問題を扱う場合も多いので、作り手の思いがストレートに伝わってくるのもおもしろさの一端だと思う。

運動のための上映会じゃなくて、あくまでも映画のための上映会にしようとするところよく話し合った。映画好きの人々が記録映画を観て、現代の多くの社会問題に出会って考えるきっかけをもち、また一方で、社会問題に関心をもつ人々がどんな映画好きになって、記録映画づくりを支えていくようになってほしいと願っている。細々とはあるが、映像を通した文化づくりの一端を担えればと思っている。

連絡先(〇七五) 三四四―二三七一

京都国際映画祭は打ち上げ花火に終わるか

今年の九月二十四日から一〇月二日まで、京都で「京都国際映画祭」が開催される。

さて、この映画祭の正式の名称は「第七回東京国際映画祭・京都大会」と言う。つまり、平安建都一二〇〇年記念のために今回だけ東京国際映画祭の開催場所を京都に引っ張ってきたと言う訳である。

これは通産省の肝入りで作られた財団法人東京国際映像文化振興会が、カンヌ、ベルリン、ベネチア等の映画祭と同じような国際映画祭のライセンスを持っており、映画祭の名称は東京映画祭として許されているので、正式な名称としては京都の名称をつけることはできない。

国際映画祭では例年のように国際コンペや若手監督作品のコンペ、招待作品の上映が行われるが、京都で開催されるについては、「多くの府市民が参加し、京都らしさが溢れ、祝祭色の豊かなものとする」とされている。

例年通りであれば六、七億円の資金が必要であり、この大部分はコンペ作品関係者、審査委員の旅費、滞在費などの費用である。

担当者の話では「一二〇〇年事業の中で最も華やかで目立つ行事ではないか。」と言うが、なるほど現在出ている一二〇〇年記念事業の企画を見

ると、その通りであろう。しかし、現在のところまだほとんど何も決まっていない。映画祭の場所は京都美術館と南座が使われることになっているが、現在南座には上映設備がない。また、期間中は市内の映画館で招待作品などの上映が行われるが、ご存知の通り、京都では設備の良い映画館が少ない。

現在、京都国際映画祭推進準備委員会の発起人が、知事、市長、映画関係者などで構成され、二月ごろには委員会の発足式が行われ、奥山融（松竹株式会社社長）が委員長、高岩淡（東映株式会社社長）が副委員長に選任される予定である。いずれにしても具体的な展開はそれからであるが、この映画祭が打ち上げ花火に終わってしまう危険は大きい。

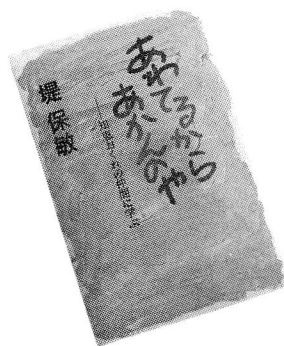
もともと、この映画祭の目的は通産省が関係していることで分かるように映画の国際的なマーケット作りであり、京都と言う場所との関連は希薄である。折から赤松良子文部大臣は日本映画の活性化のために懇談会の設置を表明しているが、この映画祭の動きとは関連がない。

しかし、映画のふるさとしてこの京都では、今もなお、映画産業は一大地場産業である。これを機会にアマチュア映画のコンペ、ロケ撮影に対する行政の協力体制の整備、映画産業に対する補助金、京都映画賞の創設などの映画振興策を積極的に検討したらどうだろうか。

（折田泰宏）

あわてるからあかんのや

堤 保敏 著



1993年12月1日 初版
天理教道友社発行 1,200円

じょうぐぼだい げけしゅじょう
上求菩提・下化衆生

奈良・斑鳩^{いかるが}の里で、知恵遅れの人たちのための福祉施設「堤塾」と剣道場「以和貴道場」を主宰している堤保敏氏が語る「幸福とは何か」。堤塾先代・堤勝彦氏との禅問答のような対話で、保敏氏は義父の言葉をかたずを飲んで待っていた。

幸福とは『安心して座る場所のあること』。先代はそれを知恵遅れの塾生から教えられたという。

地位や名声、権力を求めて——それが幸福を得る手段のように錯覚して——私たちは右往左往している。自らの幸福のため他者をも巻き込み、手段化する人の何と多いことか。

「愛」もまた、他者を所有し、支配しようとする欲から自由ではない。今、私たちは親も子も偏差値教育のただ中にいるが、知能指数IQで測定されるものは人間の何なのだろう。

うか。健常者と呼ばれる私たちの方こそ、嘘をつく能力も、悪事を企てる能力も、人を裏切る力もある。視点を変えれば「精薄」と呼ばれている彼らこそ、心が透き通っているのではないか。共に暮らす六人の塾生こそ「神様」でこの人たちから生きる力を頂いているのだと堤氏夫人は言う。

『アホにアホ言うのんが、アホなんとちがいまっか』。

能率の上がらぬ畑仕事にイライラしていた著者は、塾生から遠回しなもっともな抗議をうける。また、塾生の林君の薪作りを手伝い五寸角の柱ほどの廃材を十回くらい切っただけで息が切れてしまった著者に、

『先生は、あわてるからあかんのや。ゆっくりゆっくりやったら、息なんか切れへんで』。

指導者で健常者の著者の方が、逆に塾生から教えられてゆく。

ある日、薪作り役的林君の肉体的負担を少しでも軽くしてあげようと、

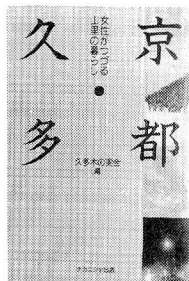
チェンソーを買って来たところ、彼はプイと横を向いてしまった。そして、仕事を失った彼の顔から精気が消えたのである。彼にとって、能率は二の次。自分の切った薪で立てたお風呂にみんなが入るのを見るのが、林君にとって生きがいだったのである。

教えることは、学ぶこと。こうして、著者は二十五年にわたる塾生との生活の中で、人間修行を続けてゆく。

また、固定化した価値観という眼の「うろこ」を落すため、できるだけほんものに接すること——堤塾では室内楽のコンサートを開いたり、各界の最前線におられる方々の学術講演会を開いたり、本格的な雅楽の鑑賞会を企画したりしている。

愚直なまで掃除に励み、掃除とはそれを通して心を清めることだとの悟りの境地を開いた周梨槃特の姿をそのまま写したような塾生岡本君の告別式には多数の参列者があふれた。

京都発・新刊三冊



久多木の実会・編
ナカニシヤ出版 1900円



佐原真外四名・著
京都書院 2300円



京都弁護士会編
京都新聞社 1400円

実の弟はその光景に「堤塾にお世話になって四十年。知恵遅れの兄は私より何倍も尊い人生を送ったのです

ね……」と。先代を含め、著者一家の五十年は上求菩提・下化衆生の五十年でもある。
(塚崎美和子)

弁護士とか法律事務所と言うのは敷居が高く、と言う声は多い。京都弁護士会は、市民に親しまれる弁護士会を目指してがんばっているが、この程多数の会員の協力でやさしい法律相談ガイドを刊行した。本棚に置いておくといざという時に便利。

国立歴史民族博物館、府埋蔵文化財調査研究センターなどに勤務する考古学者たちが、やさしい面白い考古学案内書を作りたいとまとめたもの。対象は京都府南部の古代遺跡。現場で苦労して来た者ならではの、人間臭いガイドブックである。

久多集落は、京都の市街地から約四〇キロ北に位置する過疎地だが、知る人ぞ知る桃源郷。この集落の女性グループ「木の実会」が、久多の女性たちの歳時記をまとめた。この本の一頁一頁に、男性を支えて、日々の賄いを切り盛りして生きてきた久多の女性たちの証しがある。

べんちゃん日記

⑦

弁護士 佐野井太郎

●月日

Pという町は、ニューヨークから車で二時間足らずのところにある静かな大学町で、街路の樹木はすっかり色づいている。

久しぶりのアメリカ行きは、曾祖父H・Oのアメリカ留学中の足跡をたどると言う奇妙な旅だ。

一二〇年前の話である。九州の果てK地出身のH・Oは、長崎でフルベッキというオランダ人から英語を学び、明治三年政府から派遣されてアメリカに留学する。当時、明治政府は多くの日本青年をドイツ、フランス、イギリス、アメリカに留学させ西欧文明を導入した。大変な出費のために明治政府は途中で帰国命令を出す、H・Oは幸い帰国を免れ、P大学に進学、卒業してから帰国。文部省に勤務して当時の学校制度の

設立にかかわり、後三〇年にわたり第三高等学校の校長を勤めた。明治二二年に、この京都に大阪にあった三高(当時は第三高等学校)を移転させたのは、当時の北垣知事、森有礼文相とH・Oの画策であったと言われている。H・Oの頭の中には自然豊かなP大学の光景が焼き付いていたに違いない。京都帝国大学が出来るのは明治三〇年であるが、この三高移転がなければ今の京都大学もなかったことになる。

しかし、途中で挫折して帰国し、また結核で客死した若者も多い。P町に近いBという町は多くの日本青年が大学進学の実験準備のために滞在していた町だが、その公共墓地の片隅に志半ばにして逝った日本の若者たちの墓が数基残っており、昨日お参りして来た。その一人日下部太

郎は福井藩の出身で慶応三年に渡米、明治元年にB町のR大学に学び、数学に天才的な才能を示して首席を通しながら、卒業を待たずに、結核の病に倒れた。享年二六歳。異国の地で死にも狂いの勉強をしながら志を果たせなかった若者の無念の思いが切々と伝わる墓場の雰囲気であった。

さて、異国の地で一二〇年前のことに浸ってばかりいる訳にはいかない。P町のホテルはこじんまりとした素晴らしいホテルだが、電話、F



A X完備で日本から逃げられない。

出発前から気になっていた事件が悪い方向へ急激に進展し、今夜はホテルから日本の関係者に電話をしまくることとなった。

この事件は、リース会社から一つの物件で三重のリース契約をしたのではないかと追及されていた事件で、私の依頼者は、ある会社で懇請されて業者として三重の見積もり書を書いて詐欺を幫助してしまった。依頼者はすぐに返済するとの言葉に騙されて手伝ってしまったのだが、責任は逃れられない。しかし、リース会社と警察は依頼者が主犯であると思いついていたようで、事情を説明して納得してもらい、告訴を取り下げってもらうことになっていた。

ところが今日の連絡では、来週中に示談にケリをつけないと、警察が動き出すという寝耳に水の話である。とりあえず、依頼者に連絡を取って示談金を準備することを指示し、私の帰国後に対応策を練ることとする。

る。

▲月▲日

今日の京都は、朝から黒い雲が立ち込め怪しげな天候である。こんな日はろくなことがない。しかもアメリカから帰って三日たつが、まだ時差ぼけが取れない。

事務所に着いたとたん、件（くだん）のリース会社本社から電話。あの件は、帰国後にただちに処置をして、準備万端整え示談書の案文について相手の回答を待たなければならなかった。昨日も催促をしたところである。告訴先のA市の警察にも連絡を取り、事情を理解した担当者も依頼者に同情してくれている。

ところが今朝の電話は、今週中に示談書の調印と示談金の支払いを済ませないと、来週にも警察がこちらに出向いて強制捜査をするという。しかし、これはちょっとおかしい。どうも、警察が捜査を進めない可能性が出て来たのであわてて事を処理しようと言うことらしい。

しかし、この日、相手方からあわててFAXして来た示談書最終案の内容は当方が提示した内容をほぼ受け入れた内容であったので、依頼者と相談した結果、騙されてでも早期に解決しようと言うことになった。民事責任の問題もあるから、いずれにしても話をつけるのに越したことはない。明日は急遽新任のM弁護士にA市に行ってもらうことにしたが心配なので、必要事項のメモを渡す。幼子に買い物を頼む心境だ。



佛蘭西風喫茶室
フアンソア

京・四条小橋下ル
 TEL.351-4042

● ● タクシー料金値下げ認可 ● ●

タクシー料金の値下げが全国で初めて認められ、昨年十二月一日からスタートした。注目の値下げ会社はエムケイタクシー（青木定雄会長）。運輸省は、規制緩和の流れの中で、これを認め、「同一地域同一運賃」の原則は事実上崩壊した。エムケイの今回の値下げは四ヶ月間の期限付きのものであるが、その結果次第では、規制緩和の傾向は拍車がかかることも予想される。

エムケイの今回の値下げは、小型、中型とも一〇%の幅で、他社よりも初乗りで六〇円安い。総台数は四三五台で京都市全域の台数の約五%にあたる。メーター表示は変えず、メーターの表示から一〇%控除することになる。

実施から約二ヶ月、エムケイは四月以降の値下げ続行を申請。値下げ後の一ヶ月で客が約八%増え、収入

も他社が昨年よりも約一〇%減らず中で、五%に止まったと言う。また、エムケイは約五〇〇台の増車も申請しているが、これは認められそうにもない。

一方、危機感を募らせる他社は、三社が据え置きで、四一社が約一五%から二九%の値上げ申請で、将来は三重運賃になる可能性も出てきた。

タクシー利用者は全国的に減少傾向にあり、観光都市京都の場合は他都市に比べて格段にタクシーの台数が多く、過当競争が言われてきた。

この値下げ、利用者にとっては大歓迎だが、果たして、自由競争が、どのような結果を生むことになるのか、見届けたい。

● ● 迎賓館建設に ● ●

市民から異論続出

京都の財界が待ち望んでいた「和風迎賓館」の京都誘致が決まり、政府は建設計画調査費として一億一〇

〇〇万円を一九九四年度予算に計上することが確実となった。

京都市も一二〇〇年記念事業の目玉プロジェクトとして、九六年度完成を目指す。

この建設予定地は京都御苑内の饗宴場跡地。今年三月に総理府が委託している「京都和風迎賓館調査検討委員会」の答申を受けて正式決定される予定となっている。饗宴場跡地は、一九二八年に昭和天皇のために祝宴が開かれた場所、今は市民のためのグラウンドとして利用されている。

ところが、このニュースが市民に伝わるにつれて、異論が出て来ている。一月二〇日の朝日新聞によれば、御苑を管理する国民公園保存協会の職員らが、京都御苑での建設に反対する請願署名を始めたところ、御苑利用者の中で署名が広がっている。

一九九一年には、外国要人の警護やゲリラ対策で年間一二〇日の警備態勢が敷かれ、出入り口の警備の物々しさに、散歩のお年寄りがあきらめ

て帰ってしまったという。

新聞の投書欄でも、自然豊かな環境の破壊になるとの声が出ており、京都弁護士会の環境保全・公害対策委員会でもこの問題を取り上げて調査することとなった。

知事交際費

最高裁逆転判決

「大阪府知事交際費公開請求訴訟」で、最高裁は一月二七日、相手方の個人・団体が識別できるような情報は非公開で良いとする判断をなし、府に対して全面公開を命じた大阪高裁判決を破棄し、審理のやり直しを命じた。

最高裁の判断によれば、知事の交際は「相手方との間の信頼関係や友好関係の維持増進を目的として行われている」から、懇談の相手方の氏名が明らかにされれば、相手方に不快、不信の感情を抱かせ、今後、府の会合への出席を避けるなど、容易

に予想できるというのである。

情報公開に関して、最初の最高裁判決であり、この判決の全国の実務に与える影響は大きく、これまで順調に根付いて来た情報公開制度の進展が、時代からずれた最高裁裁判官の誤った判断のために大きく停滞することとなった。

近畿放送、競売申立

イトマン事件に絡んで、近畿放送(KBS京都)の土地、建物、放送機材一式が、ゴルフ場会社の借金の担保として、ダイエーファイナンスに抵当権が設定されていた事件で、ダイエーファイナンスから債権を譲り受けた京都エステートが、昨年一月二四日、競売の申立をなした。負債は一四六億円。

これより先、近畿放送は期限一年で放送事業免許の更新を受けているが、再度の更新も含めて、放送事業の継続について厳しい状況を迎える

ことになった。

ダイエーファイナンスは、九一年一二月に債務者のゴルフ場会社の利息払いが停止したために、近畿放送との間で、本不動産の代物弁済の交渉を続けてきたが、近畿放送側はダイエーグループの経営参加を求めたために交渉が難航し、ダイエー側は子会社の京都エステートに債権を譲渡。七月には交渉が決裂していた。

近畿放送は、約三三億円の累積赤字を抱え、従業員のボーナスさえ支払いに窮している状況で、融資返済は到底できる力はない。

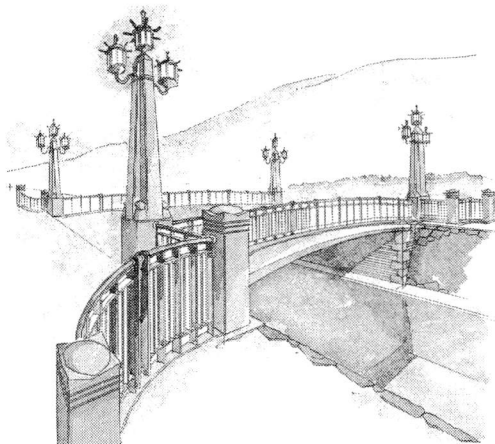
KBS近畿放送労働組合は、ダイエーグループを含めた地元政財界で株式を持ち、長期的に近畿放送に金融支援してもらうことを期待するが、今のところ、いずれも反応も消極的。その原因は現在の近畿放送の株主構成にある。キョートファイナンス、許栄中関係の影響力を払拭しなければ、社外からの支援を仰ぐのは困難である。

建築探偵団調査

⑨

疏水二条橋

円満字洋介 (住生活研究所員)



三大事業の完工した一九一二年の翌年の春、岡崎公園西側の疏水に新しい橋が架けられた。今は失われたこの小橋を意匠したのは、京都高等工芸学校（現京都工芸繊維大学）教授の武田五一であった。橋頭には石柱が立てられ各々に三つのランタンが取り付けられていた。武田は後年、西日本各地の名橋を意匠している。今世紀に入って各地で都市改造が本格化すると建築家が橋梁の意匠を手掛ける様になっていた。一九〇九年には大阪の心斎橋を野口孫一が、一九一一年には東京の日本橋を妻木頼黄が設計している。心斎橋はゴシック風のガス灯が印象的に並び、水上に欧米流の街路を出現させている（現存）。日本橋は橋の中央に巨大なランタン塔を立て青銅の怪獣達を配していた。

武田は小橋を分離派らしく装飾的要素を控えたすっきりとした姿に仕上げた。ちなみにワグネル教授の「近代建築」によれば都市の橋梁は

橋上からの眺望を守るとともに「これまで全く疎かにされていた橋の軸方向の姿を仕上げ、こうして、橋に近づく人に美しく見えるために必要な用意をすること」とした。「それゆえ、多くの場合、橋頭を大いに強調し、手摺りを豊かに細工するということになるう。」としている。日本橋や心斎橋がメガネ橋と呼ばれた様にシルエットの基準面を水上に置いたのに対し、武田は橋の視座を「これまで全く疎かにされていた橋の軸方向」に置き「橋に近づく人に美しく見えるために」橋頭を石柱で強調したのだった。

さて、この小さな橋を考えるためには三大事業へ至るまでの経緯をひとわたり見ておく必要があるのだ。

一八九八年の市政特例の撤廃によって初代京都市長に内貴甚三郎が就任した。内貴はこれまで幾度も登場している様に浜岡光哲や田中源太郎と並ぶ京都近代派三元老の内のひとりである。特例都市とは市長を知事が

兼任しており言わば中央政府の直轄都市だ。特例撤廃まで京都市長は空席だったのである。内貴の最大の功績はこの街の近代派と旧市民と中央政府との三者協調を引き出した点にある。三者の盟約による共通の利益は「伝統工芸の近代化」にあった事は云うまでもない。東京・大阪・京都の三府における特例都市で旧市民層が大きな発言力を持ったのはこの街だけだった。京都は三都に列していながらその構造は地方諸都市と同じものであったのだらう。

内貴市長は「伝統工芸の近代化」のコンセプトに基いて烏丸通りと御池通りを軸とした都市改造を構想した。しかし、この構想は対露戦争の煽りで着手されなかった。この街の都市改造は次期市長西郷菊次郎による三大事業まで待たねばならなかった。一方、岡崎公園を含む鴨東地区は「伝統工芸の近代化」のための教育拠点として着実に整備されていた。

内貴市長は国立の工芸教育機関として吉田の地へ高等工芸を誘至する事に一九〇一年成功した。続いて一九〇三年には常設の博覧会場として岡崎公園が開園する。公園内の展示施設として一九〇九年に京都商品陳列所と府立図書館（展示室を併設していた。）とが相次いで竣工し、また同年には竹内栖鳳らの市立絵画専門学校が高等工芸の隣りに開校している。

高等工芸へ招聘されたのは武田の他に洋画家の浅井忠や京都帝大に理工科大学を創設した化学者の中沢岩太らであった。彼らは高等工芸創設準備のために共に一九〇〇年巴里万博の視察を行った。さらに欧州諸都市での工芸を調査した上での赴任であった。高等工芸開校後の彼らの活躍には目覚ましいものがあったと言っておこう。彼らは欧米流の工芸教育を始める一方で陶芸家団体や漆芸家団体を次々と結成し「伝統工芸の近代化」と取り組むのである。彼らは

この街を日本のダルムシュタットにしたかったのだ。その活動の拠点となったのだがこの岡崎であった。

武田によって設計された陳列所と図書館は彼ら分離派（と呼ばせてもらう。）の活躍の場として整備されたものだった。一九〇六年に浅井はいよいよ関西美術院を岡崎町広道に開院する。その展覧会は毎年図書館を会場として行われていた。これら二つの展示施設は、ウィーン分離派館と同時代に彼ら分離派の拠点として機能していたと考えていた方がいい。その事は取りも直さず「伝統工芸の近代化」の実践であった。その岡崎公園へ渡る橋として武田は疏水二条橋を近代的な分離派様式として意匠した。常設博覧会場の正面玄関とも言ふべきこの橋がなぜ公園の南側ではなく西側に架けられたのであろうか。その理由はこの街の都市改造のコンセプトと深く結びついていたのである。前置きが長くなったがここからが本題である。この謎は次号に解き明かされるであらう。

京都エコライフ情報 ③

冬の鴨川に入って生きものを見る



大塚 泰介

(京大農学部大学院)

夏に川に入って遊ぶ人は数あれど、冬の寒い時期に好き好んで川に入る物好きはそうそう居りません。しかし冬の川に入れば、そこには夏の川とはちょっと違った面白さがあります。冬の鴨川は河川改修によって濁りが非道いことが多く、水の底が見えずに閉口することもあります。年末年始には工事も止まって生きものを観察するのに良い。というわけ

でこの年末年始には何回か川に入って、生きものを調査していました。

冬の川が夏と違うのは、川底に付着する藻類が非常に多いという事です。賀茂川の出町柳付近では夏でも緑色のシオグサが繁茂することがありますが、冬の主役は茶色っぽい珪藻です。下流の方ではがみが混じったり、ミズワタがまじっているのか少し白み掛かっている何となく汚いですが、上流にいくとやや緑掛かった茶色で石の上を絨毯のように覆っていてなかなか美しいものです。珪藻の大きさは $10\mu\text{m}$ 〜 $100\mu\text{m}$ (千 μm — 1mm) 程度の事が多いのですが、数は大変に多く、石 1cm^2 当たり一千万個にも及ぶことがあります。また種類も大変に多く、私の確認しただけでも百種類以上もいます。

冬の川には水棲昆虫も多いです。水棲昆虫には春〜夏に羽化するものが多いので、夏にはちょっと見にはどこにいないかわからないほど小さいことが多いのですが、これが冬にな

ると育ってきて、たくさんいるのが分かるようになってくるのです。

そして多くの魚は眠っています。

「眠っている」というのは正確な表現ではありませんが、物陰などで静かにしていることが多いということです。しかしほとんどの魚が丸々と太っています。魚は変温動物なので、水温が下がれば基礎代謝量も下がって、少しの餌で十分になるのだそうです。ただしやはり成長は鈍るといわれています。

前々号で紹介したドンコが、終野ダムのツルヨシの根の下で眠っているのを「発見」しました。根元に網をつつこんでかき回したら入ってきたので、正確には「叩き起こした」わけですが。しかしこの場所では河川敷公園化にともなう改修が現在進行中であり、川の一部が埋められつつあるので、ここに棲んでいるドンコの何匹かは眠っている間に土砂の下敷きになってしまいうに違いありません。

発酵を待つ



多津八洲子

六年前に來日して以来、食欲に日本を自分の身体の中に取り込もうとしているアメリカの女性アーティストから味噌の作り方を教えて欲しいと頼まれた。

大豆や米は買ってくるとして、せめて麹は自分で作らないと味噌づくりの醍醐味は味わえない。麹菌の繁殖を促すには温度と酸素の供給を微妙に調節しなければならず、彼らの生殺与奪の権を自分が握っているのだと思ひながら夜を徹して見守る作業にはたまらない魅力がある。

しかし残念ながら今回はお互いに時間がなく麹は市販のものを使うことにした。大豆を炊いて、潰して、それに麹と塩を混ぜて、瓶に詰める。

当たり前のことだが味噌は作ってすぐには食べられない。そのまま一年以上寝かせておかねければならない。その間に材料の性質、材料の配分、場所、天候、作る人の性格などの要素が微妙に関わり合って、味噌という日本文化の基ともいえる食品がじっくりだされるのである。

味噌に限らず漬物、納豆、醤油、酢、酒などの醗酵食品は全て時間がその生成に重要なファクターを占めていて、時間を待つことの中に人知を越えたものの配慮に委ねるという、他力本願的な、アジア的な身体感覚が働いている。

しかし世界のグルメが空を飛んで我々の食卓に届く慌ただしい現代社会の中で、この待つ行為は個人の生活レベルでは非効率ということで切り捨てられるようになってしまった。今では会社で働き蜂になってお金を稼いで、それで味噌でもなんでも買えばいいという道理が罷り通っている。

しかし、「肉は今までにたっぷり食べてしまって、その事を思うだけで嫌悪してしまうから、せめてこれからは自然の理にかなう正しい食物を食べて、肉食の穢れを少しでも癒したい」と言うアメリカ女性の切実な身体浄化の欲求を耳にする時、高度に発達した科学技術が人間をも管理しはじめたこの世紀末、生物としての人間の身体が言葉や理屈を越えて、直観的に正当なものを見定める能力を発揮しはじめているのではないかと、ふとそんな考えが浮かんできて、久しぶりの味噌づくりにしばし時を忘れて興奮してしまった。

宇治茶専門店

星竹村玉翠園本舗

〒606 京都市左京区熊野神社東入
電話 〇七五 七七一一 一三三九

本店 京都府宇治市
池田 京都府池田市

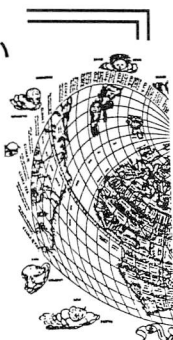
て、人生は一度しかないんだものね」「そうですね」と相槌を打ちながらも私は、画家がこれから三年間の沈黙の後に発表しようと目指している新たな作品のイメージを探りかねていた。「あんな風な絵」と画家自身

画家との出会い

畏怖すること の歓び

人見ジュン子

(ギャラリーヒルゲート)



武蔵野のはずれの山肌へばりつのように建ったアトリエの庭。冬枯れの木の葉を片手でむしりながら画家が言った。「あんな風な絵を描けばたしかに売れるけど、それを次々と続けていくのはつまらない。だっ

が言った絵は、世に言う「売り絵」などではなく、充分に美しく、けれど思案的で幻想的でもある素晴らしい作品なのだから。

初対面の画家と会う時はいつも緊張する。とりわけ今、目の前にいる司修画伯は、長い間遠くから眺め、その著作を探し回って読み、ひそかな共感をたよりに個展の開催を申し入れ、奇跡的に了承されたその人である。「それで、どんな流れの作品にしますか？ あなたが決めなきゃ。」画家の問いかけに、空気がピンと張りつめる。答えられない。異った表現形態の作品群を前に、私は自分がどんな作品展を目指せば良いのか迷っていた。

先程から、作品を挟んだ対話の中で、私は画家の存在に圧倒され続けていた。絵を描くことへの思いの深さ、過酷な生い立ちの中で自己を切開いて見につけられたのであろう暖かさ。そして簡単な解釈を寄せつけない作品たち。それに対置する言葉

を見い出せないまま、私はとまどい、立ちすくむ。

画家と画廊という立場で対峙する時、私はいつも自分の非力を感じる。それは画廊主としての未熟さであり、人間としての存在の軽さでもあるのだろう。「私だって一生懸命仕事してるんだ」と思い返してもやはり、とてもかなわない力の差がそこにある。その度に打ちのめされながら、実はその畏れこそが仕事の歓びであるのを感じる。畏怖を感じるような作品を展示できることの幸福。その中にこそ成長の糸口があるのではないかと思うから。

未熟な私の混乱に同情したのであろう、司画伯が決めて下さったのは、同じ前橋を故郷とする詩人の作品にイメージを重ねた『エレナ！萩原朔太郎「郷土望景詩」幻想』の原画展であった。

三月八日からの展覧会で、私が感じたのと同じ畏怖を感じて下さる方があれば、幸せである。

音楽が好き



河上ひかる

『ラグ』企画・制作スタッフ

「僕は『音楽』が好きだ。ジャズが好きであったり、サックスが好きだという以前に、『音楽』そのものが好きだ。」サックスプレーヤーで、ミジンコ研究家、役者……マルチな才能で大活躍の坂田明さんが、先

日のライブの後、こんな話をしていらした。「ロックだ演歌だとカテゴライズするのは無意味だし、されるのが迷惑な時もある。僕は僕の音楽をやりたい。僕の目指しているのは日本人である自分の感性で、世界中

の人々の魂を揺り動かす音楽を創ること。」その明快な物言いに、私も心から共感し、やっぱり原点は自分の感性だなと思った。

私も『音楽』が好きだ。ライブへ行って熱くなるのももちろん好きだし、家でお気に入りのアルバムを聞き込むのも好き。新曲をバッチリ予習してコンサートへ行き、一緒に口ずさむのだって楽しいし、ドライブの時のBGMは楽しさを二倍にしてくれる。たまにはカラオケへ行ったり、懐かしい歌に昔を振り返ったり、親しい者同士歌いまくるのも悪くない。ジャズにソウルにロックにクラシック、フォークにレゲエに邦楽にタンゴ……。並べるだけでも心が踊る。坂田さんの「好き」とは随分グレイドも内容も違うが、それでも私は私なりのアプローチで、音楽が好きだ。世の中には音楽に関して多少のウンチクや素養がないと「音楽が好き」とは言えないと思っている人が割合多い。「ライブって楽しいよ。」と誘っ

ても「あまり音楽のこと知らないから。」と逃げられてしまうのだ。確かにいろんな知識があるほうが楽しさもよりふくらむこともあるけれど、邪魔になることだってある。そんなことよりもまず大切なのは自分の感覚に素直になって音楽を聴いてみて、自分なりに楽しいかどうかということ。ド・レ・ミの音を全身で感じて心が動けば、そこからあなたの音楽世界が始まります。

さあ今年はずっとオープンな気持ちで、「音楽好き」になりませんか。

西陣織帯地卸
和装小物創作
子供和装品の製造
アパレル製品製造

株式会社

丸 池

〒602
京都市上京区堀川通一条上ル
TEL 075-431-3381
FAX 075-431-3379

最近TVの某CMで「三都物語」というコピーが使われている。キレイな女優さんがゴージャスな服を着て、神戸の夜景や大阪の街並や京都の神社、ステキな三都をまわるのだ。

しかし私にとっての三都物語は、キレイやステキやゴージャスではつまらない。こちら平日なら毎日が三都巡り、京都から神戸の学校へ通っている。往復五時間、くたびれた二十歳だけれども、各都市の若者や街のちがいを発見したりして楽しい。

大学はほとんど神戸の子、次に大阪の子、京都の出身は少ない。

話していると他から見た京都のイメージが逆照射される。おどろいたことに京都では口が悪いと言われる私が「上品やなあ、京都弁ええなあ」と言われる。同じ関西でも、言葉遣いが微妙に、全然ちがうのだ（京都でも北と南では少しちがうけれども）。そこで京都弁のマネをされたりするのだが、今どきの京都人が日常めったに使わない「はんなり」とか「そ

うどすえ」が、京都弁だと思われるいたりしてビックリ。

服の好みや流行もちがっている。大阪は原色を着る子や古着の子が多い。神戸の子は、母親から受け継がれたようなエレガントで上品なおべべを着ている。京都は地味な色を好むが、センスのいい人が多い（と私

「三都物語」の主人公は



高橋 葉

は勝手に思う）。

夜あそびにしても京都は街が狭いせいか、すぐ群れやすい。大阪は初対面でも昔なじみの友だちみたいに話しかける。華やかそうな神戸はなぜか、面白そうなスポットは少ない。共通点は三都それなりに、都市としてプライドが高いことだろうか。

私はこれまで、京都で事足りる人生を送ってきた。大阪や神戸へ行くなどは「小旅行」、素人だった。しかし三都を日々またにかけて暮らすとなると、美しい夜景だの自慢のグルメだの有名な寺だの、きれいな世界だけを見て感心してもいられないのだ。今日も「ぜんざいが好き」と言ったら「京都人らしいな」と京都をいちいち意識する返事がかえってきたが、そういう外からの規定にハッと、背中から京都の習慣やしきたりを教えられるような気分にもなり、ふと考える。

私の友達にはクラブのために、朝四時に起きて京都から神戸へ通う強者も何人かいる。逆に神戸から京都に通う人もいるだろう。わたしはまだまだ達人ではないが、三都物語の主人公はキレイな女優さんや旅行者というよりは、三都を毎日行き交う通学・通勤者って気がするのである。それにつけても京都はど高校生と年寄りが元氣な街は少ないんじゃないか。

ステバあさん
が行く

⑩

そんな若者に
誰がした？

神楽岡ステ

聞いて。聞いて。こないだ、若者とケンカましてん。いや、ケンカになりまへん。これがさびしい。

年寄りはずぐ「近ごろの若者は挨拶ひとつ知らん」とグチるけど、そない若者と挨拶しなかったらわての方が出むけばええ、と思いまして

な。老人会で青空市を出すことになった折も折、近所の大学では年に一度の学生祭と聞きまして、わてはおつれと手作りのチラシもって、青空市のお誘いに行きましたん。

校門の前大通り、学生さんがウヨウヨ、青春の匂い。わても気がは

しゃいで、さて百万ドルの笑顔でチラシまこ。としたら、腕章はめて門の前にいた二、三の学生さんが「許可とりましたか？」と来た。

へえ、チラシまくにも許可がいりますのん？ なるほど、こんな大通りで老人がウロチョロしたら危ないと、親切な警察の交通課あたりが護衛したがるのかもしれない。そやけどパトカーでも来たら大層や、「ホンの十分でし・まいますさかい」とわてらやんわりお目こぼし願うた。

ほたら「大学の許可が必要です。当局の許可を得て下さい」やて。言葉あたりはやさしいけど、なんで当局の許可が出てきませんや。戸惑うてたら、二、三人が五、六人になり、十人になり、わてらの周りには人だかり。よお見たら、いかつい顔の男の学生、さぞやカシコそうな女の学生と色とりどり。若さに囲まれ、わて赤面や。しかし味気ない、みな当局の許可をくりかえさる。

ついにおつれがどなった。「ここ

は大学の道やおへん」。わても言うた、「天下の公道や」。

学生の人だかりはちょっとひるんだ。そやけど物わりの悪い年寄り連中という顔で、「大学当局へ行つて下さい」しか、よお言わん。物のわからん学生さんや。

ほらアンタらのお祭りやさかい、その実行本部に聞いてみてくれと言わはるんなら、まだしもわかる。運営上の都合もありますやろけど……

「当局なんぞ知らん」「アンタはんならメエいっぱい広がつて学生の専用道路みたいに毎日歩いてはるけど」「ここは町の道なんじゃ」「その辺、ちーとは勉強おし」。わてらの方がもうゲリラみたい。

それでも学生はどなり返しもせん。が、聞く耳ももたん。ひたすら真面目に当局の許可を合唱や。何でも手むかう若者も難儀やけど、この従順も気色悪い。帰って貴若に「キショー」と言うたら「そんな若者に誰がした」やて。肉体の門どすな。

▼このところ、映画をみる機会が減りすぎて。特に、今号の編集に飛び入り参加してから一月あまり、映画館へは行ってないんじゃないかな。取材を通じて、映画をみたい気にさせてくれる人にたくさん会えた。そろそろ、暗闇の中にゆったりと体を沈めてスクリーンの上に光が投げかけられるのを見る、あの瞬間に感じるぜいたくな気分が恋しくなってきた。

▼映画を面白くするのもつまらなくするのもひとえにこの自分の見かた次第なのだということを、この特集のお手つだいを通して確信するようになりました。

(野口良平)

▼どうにも京都はモノクロっぽい。ロールシャッハのカラー図版のようなショックが恋しい。それが誕生する前から、生まれるにふさわしいかどうか判断する権利を自分は持っているのだと信じて疑わない(過去)とはつき合っていない。月光の波打際で、流動する今に交際を申し込む。

(原祥雄)

▼斜陽産業と言われて久しい映画産業の現場を訪れて、いろんな方からお話を伺っている時、ふいと、二十年前の遠い一日が蘇って来た。

詩人・森崎和江さんにご案内していただいて歩いた筑豊の野山。そこはかつて豊かな炭田地帯であったが、エネルギー革命のおおりですでに閉山し、ボタ山はいつしか緑の山となっていた。坑夫たちの厳しかったであろう労働や、

かつて展開された激しい労働運動の跡は、時の流れと共に忘れられ、それらにかかわった人々の想いも雨に煙る筑豊の風景の中にかすんで消ようとしていた。胸を打たれた。

今号、取材してみても、現場の人たちの映画への想いをどこまで伝えることができるのか……。心もとない……。

(塚崎美和子)

▼女七、八人、放課後日々チャンバラにあけくした。気に入った木切れを削り、腰に差し、昨日は杏樹次郎だ、今日は旗本退屈男よ、明日は猿飛佐助か丹下左膳か。役柄は自然に決まった。歌のうまいマリちゃんは美空ひばり専門、ミツコは千原しのぶの女スリがはまり役。錦之助も橋蔵も歌った時代だが、二人ともおそろしく下手だった。その下手具合もまねて、熱心に主題歌まで覚えた。

即興劇だ、ドラマは同時進行で迫力満点。あれは将軍塚、充実の十二、三歳の頃。

(高橋幸子)

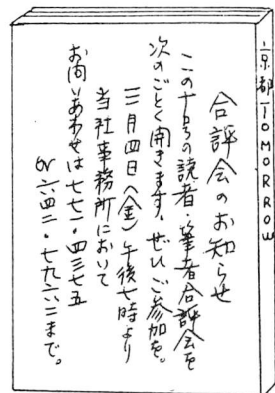
▼鴨川で開かれた年末の二二〇〇年事業大イベントを見損なってしまった。生来、お祭りの大好きな者にはどんな趣向だったか興味津々で、年明けて早速見に行ったN君に様子を聞いたが、大して感激した様子がない。何事にも、無感動なN君のことだから、聞いた相手が悪かったが、考えて見れば、場所、予算から考えて期待する方が無理だったかも。やっぱり最大のイベントは国際映画祭かな。

(折田泰宏)

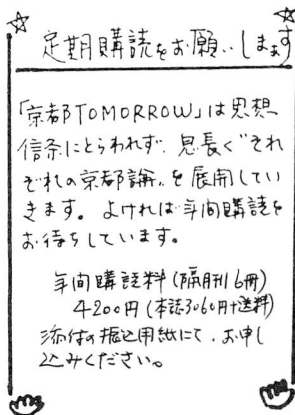


特集 「建都1200年事業を点検する」 (仮)

いま京都は1200年事業で大騒ぎ。
果たしてこの実態は?



合評会のお知らせ
この12月号の読者・筆者合評会を次のように開きます。ぜひご参加を。
三月四日(金)午後七時より
当社事務所において
お申し込みは七二・四三・七五
or 六四・二七・九三まで。



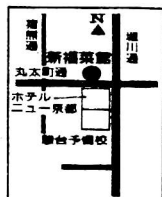
「京都TOMORROW」は思想信条にとらわれず、見長く「それぞれの京都論」を展開していきます。よければ年毎購読をお待ちしています。

年毎購読料(隔月刊6冊)
4200円(本誌3060円+送料)
送料は振込用紙にて、お申し込みください。

ご存知 ラーメンの元祖

あの 京都駅たかばしの新福菜館が 河原町店に次いで 堀川丸太町にも……
 たっぷりのチャーシュー! 独得のしょうゆ味!

飲んだあとにはラーメンが旨い



丸太町店

■午前11:30～午前3:00

■定休日 水曜日

京・上京区堀川通丸太町西入北側

phone (075) 822-4070

新京都信販カードをご利用ください。

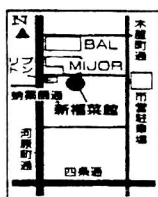
河原町店

■午前11:30～午前3:00

■定休日 水曜日

京・中京区河原町錦菜館東入南側

phone (075) 231-2355



新福菜館

米安田火災海上保険(株)

代理店

(株) リリーフ

〒613 京都府久御山町田井ミスノ51-2

トラストビル3F

☎(075)632-2290(代)

安心
 の切り札!
 損害保険のことなら
 おまかせ下さい。

京都 1994.3

Vol.2 第10号(通巻32号) 定価510円(本体496円)

TOMORROW

隔月刊誌

発行 株式会社・京都TOMORROW 代表 豊永家明

編集委員 折田 泰宏

高橋 幸子

塚崎美和子

編集協力 岡田 榮・井上 茂

・野口良介・那須耕介

・原 祥雄

〒606 京都市左京区吉田神楽岡町8(楠本方)

TEL075-771-4375

FAX075-771-9837

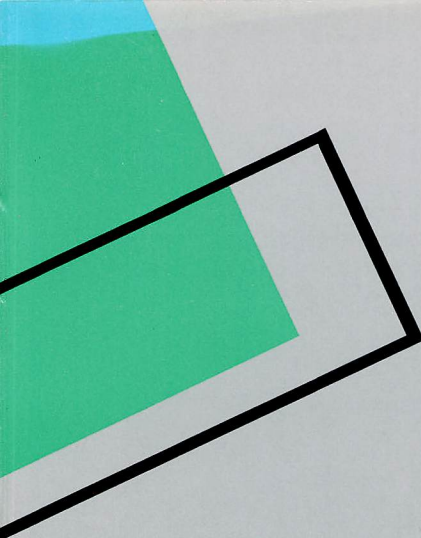
ご購入ご希望の方へ

●1部購読 510円(送料込み 700円)

●年間購読 3,060円(送料込み 4,200円)

ご購入希望の方は、郵便振替・京都2-20274

京都TOMORROW



ISSN 0915-1036

定価510円(本体496円)